

清末小説から 115

2014.10.1

- いくたびかの阿英目録 7 樽本照雄 1
《氷洋鬼嘯》の原作 渡辺浩司 4
晩清小説家“天公”考略 謝 仁敏 12
劉半農譯於《新青年》中及法國短篇小説翻譯原著補考 古 二 徳 17
早期漢訳ドーデ「最後の授業」 4 胡適訳「最後一課」のばあい 神田一三 23
周作人漢訳ヨークイ・モール 3 完 『匈奴奇士録』の英訳底本について 樽本照雄 29
清末民初俄国小説译介路径綜考(上) 付 建舟 36
商務版「説部叢書」研究の昔と今 3(上) 改組の時期 樽本照雄 42
『清末民初小説目録 第 6 版』ウェブ公開中 非売品です。ページ罫 / 清末小説から 11、52
清末小説研究会 日本〒520-0806 滋賀県大津市打出浜 8 番 4-202 樽本照雄 方

60回。光緒癸卯（1903）世界繁華報館刊。線装30冊。又光緒三十年（1904）翻本。托日本知新社版，吉田太郎著。

いくたびかの阿英目録 7

樽 本 照 雄

『官場現形記』の海賊版は日本人が関係するかどうかは、研究者の問題だ。阿英目録を利用する人が奇妙なことをしている例を紹介しよう。

「官場現形記」についての短い記述がある。全文を引用する。

[阿英80]官場現形記 南亭亭長（李伯元）著。

著名な作品であるにもかかわらず、版本についての説明が少なすぎる。ほかにも重要な版本はあるのだが、これ以上の言及がない。

今、それはいわない。

問題は、吉田太郎だ。1904年の「複製本（翻本）」と記述する。吉田太郎という名前といい、日本知新社といい、あきらかに海賊版であることを示している。翻訳作品ならいざしらず、李伯元の創作作品なのだから。

回数と冊数が書かれていない。説明不足である。吉田太郎と書いて実物を阿英が見ていないはずがない。ところが、細部の記述がないのだ。そうすると、のちの研究者は勘違い、思い違いをする。その証拠は、魏紹昌が書いた説明にみることができる。

魏紹昌編『李伯元研究資料』（上海古籍出版

社1980.12。略称[魏季])に「官場現形記」の版本を説明する部分がある。専門書だから避けて通ることはできない。関係部分を翻訳する(別の場所に原文を引用した)。

比較的早期の復刻本に粵東書局石印本および吉田太郎著といつわった日本知新社の版本がある。この2種類の全冊(原文は全帙)は、刊行日付はともに光緒三十年(1904)と書いている。すなわち世界繁華報館初編12回が発行された翌年である。その時、全部はまだ出そろっていない。この日付はおそらく不正確で、実際の出版は1905年より後にちがいない。72頁

今、日本知新本だけを問題にする。

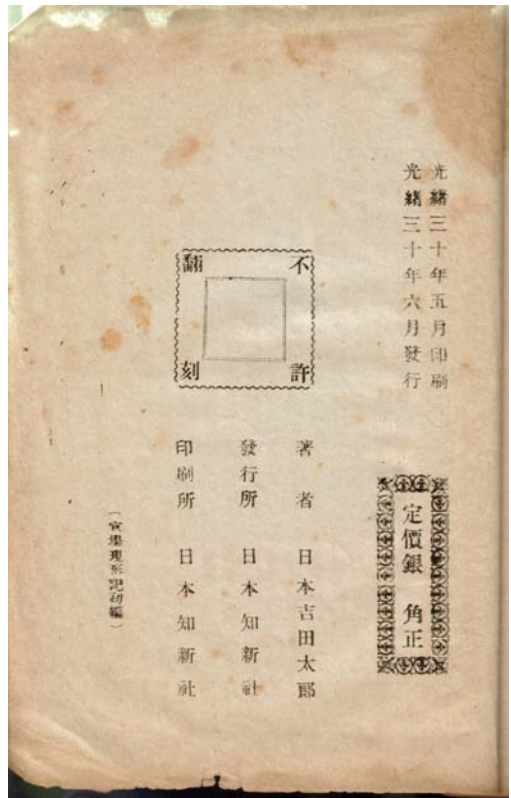
よく見てほしい。魏紹昌は、「刊行日付はともに光緒三十年(1904)と書いている(刊印日期均署光緒三十年(1904))」と明記しているのだ。その書き方からして実物を見ているかのような印象を受ける。未見だとの注釈はない。阿英目録を引用したのかもしれないが、そうだと注記していないのだ。どう読んでも、彼は自信をもって断言している。

魏紹昌は、ここで誤解をした。私はそう考える。阿英の記述には、日本知新本本の回数と冊数が書いていないことが理由だろう。日本知新本は60回本だと思ひこんだ。だからこそ、粵東書局石印本と並置し、全冊だといい、1905年より後の刊行だと言いつつ切ったのだ。

だが魏紹昌は、説明から受ける印象とは異なり実物を見ていない。阿英目録の説明不足にからめられて誤解をした。

彼が誤ったとなぜ私にわかるのか。私は原本を所蔵しているからだ。

日本吉田太郎名を奥付に示した『官場現形記』日本知新本は、光緒三十年(1904)六月刊の初編12巻1冊である。日本を前面に押し出しては



日本知新本 表紙と奥付

いるが、実は中国人商人が作成し販売した海賊版なのだ*24。連載途中にもかかわらず、海賊版が出る。それくらいに評判をよんだ作品だとわかる。

日本知新社は、日本に1冊があるくらいだから中国にも当然どこかに所蔵されているだろう。阿英は所蔵していた。ところが、それを探した現代の中国人研究者はいないらしい。奇妙なことだ。

以下に魏紹昌の原文を引用しながら、そのほかのいくつかを簡単に紹介する。解説をすこしつけ加えた。文献名と刊年、および執筆者のみを示す。発行順にならべて、略号とその頁数も添える。略号の編者、出版社などの詳細が知りたければ、樽目録第6版の「説明」を参照してほしい。清末小説研究会ウェブサイトで開催している。

1980[魏李72]「較早的翻印本有粵東書局石印本和假託吉田太郎著的日本知新社刊本，此兩種書的全帙，刊印日期均署光緒三十年（1904），即世界繁華報館初編12回刊行的次年，其時全書尚未出齊，此日期恐不確，實際出書當在1905年之後」。この説明が誤りのもとだ

1988樽目録初版203 光緒30.6(1904) 初編12巻1冊。実物を見て掲載している

1990高国藩[提要863]阿英『晚清小説史』を引用し「顯系偽作」と誤る。偽作ではなく、海賊版

1993童煒鋼[歴近154]鉛印本とするだけ。巻数は不記

1997樽目録第2版183 光緒30.6(1904) 初編12巻1冊

1998王継權、夏生元[系目275]鉛印本とするだけ

2002樽目録第3版201 光緒30.6(1904) 初編12巻1冊

2004章鳳娟[目白89]は次のように説明する。「此後有粵東書局石印本和假託吉田太郎著的日本知新社刊本，二本均署光緒三十年刊印，但當時全書尚未出齊，此署年恐不確，刊印時間不會早於光緒三十一年（1905）年底」。魏紹昌の文章から

無断借用した。実物を見ておらず、魏紹昌を引き写したから「此署年不確」と誤る

2005歐陽健[五百1582]鉛印本とするだけ

2008劉永文[劉晚248]「日本吉田太郎（李伯元），日本・知新社，1904年」とする。劉永文は樽目録第3版を参考にしているのだから、なぜ原文の「光緒30.6(1904) 初編12巻1冊」を写さないのか。樽本の記述が信用できなかったのだろう

樽目録以外は、総じてかんばしい成果ではない。印をつけた目録には、はやくから正しい指摘がなされている。にもかかわらず、中国人研究者は学習していないのだ。それが、私を落胆させる。どうしてそうなるか。その答えは、顔廷亮の著作のなかにあった。 罫

【注】

24) 樽本「官場現形記」裁判の真相 日本を装った海賊版 『清末小説から』第90号2008.7.1、1-19頁。要約：『官場現形記』の海賊版については、いくつかの候補をあげたことがある。当時の新聞を調査した。ただし、私の努力と資料が不足しており特定することができなかった。その後、中国の研究者が新聞を調査して裁判の時期を特定した。それに触発され、再度調査を行なう。新聞のマイクロフィルムを入手できるようになったのが研究状況の大きな変化である。その結果、いくつかの新しい新聞記事を見つけることができた。先行論文では言及のなかった資料だ。「官場現形記」裁判は、日本人になりすました中国人を裁くものであった。裁判がどのような経過をたどって落ち着いたかを新聞の広告と記事によって明らかにする。

参照：劉穎慧「李伯元《官場現形記》版權訴訟始末」『華東師範大学学報（哲学社会科学版）』2006年第3期（総第185期）2006.5(.15)。陳大康「歴史上の小説盜版案」ウェブ版。『文匯報』2007.2.27。あるいは2006.10.10、11.24。海賊版『官場現形記』について劉穎慧論文と一部分が重なる。

本誌第116号は2015年1月1日公開予定

《氷洋鬼嘯》の原作

渡辺浩司

1

《小説時報》第十二期(有正書局,宣統三年七月初十日=1911.9.2)に、《氷洋鬼嘯》なる短篇作品が掲載された。“短篇名譯”欄掲載なので、翻訳であることはわかるが、書名下には“(林琴南)” (傍点略)とあるだけで、原作は不明であった。

このたび、原作が判明したので本稿で報告する。

原作者は、A.Conan Doyle、原作は、『The Captain of the “ Pole-star ”』、原作の雑誌掲載初出は、『Temple Bar』 Vol. 67(Richard Bentley and Son, 1883年1月)、後に、短篇集 A. Conan Doyle 『The Captain of the Polestar and Other Tales』 (Longmans, Green and Co., 1890年)に収められた*1。

原作者 Arthur Conan Doyle は、1859年生、1930年没、英国の作家で、医師として活動していた時期もあった。現在でも、シャーロック・ホームズの作者として有名である。

訳者“林琴南”は、本名だとすれば、林紘である。林紘は、1852年生、1924年没、晩清から中華民国期にかけて、翻訳小説を大量に発表し、外国文学の紹介に大きく貢献した。“琴南”は字である。拙稿「林訳小説 紅篋記 などの原作」((上)-『清末小説』32(清末小説研究会, 2009.12.1), (下)-同33(同, 2010.12.1)掲載)で採り上

THE CAPTAIN OF THE “POLE-STAR.”

[Using an extract from the singular journal of JOHN M'ALISTER RAY, student of medicine.]

September 11th.—Lat. 81° 40' N.; long. 2° E. Still lying to amid enormous ice fields. The one which stretches away to the north of us, and to which our ice-anchor is attached, cannot be smaller than an English county. To the right and left unbroken sheets extend to the horizon. This morning the mate reported that there were signs of pack ice to the southward. Should this form of sufficient thickness to bar our return, we shall be in a position of danger, as the food, I hear, is already running somewhat short. It is late in the season, and the nights are beginning to reappear. This morning I saw a star twinkling just over the fore-yard, the first since the beginning of May. There is considerable discontent among the crew, many of whom are anxious to get back home to be in time for the herring season, when labour always commands a high price upon the Scotch coast. As yet their displeasure is only signified by sullen countenances and black looks, but I heard from the second mate this afternoon that



げた訳者の一人である。なお、翻訳協力者は記されていない。

2

船医の日記という形式で著された原作のあらずじを、短篇集に拠り紹介する*2。

[医学生、John M'Alister Ray の日記からの抜粋]

9月11日-北緯81度40分、東経2度で船は氷原の中で止まっている。白夜の時期は過ぎ、南側の氷が固まると船は抜け出せなくなるかも知れない。この時期まで、この高緯度にいる捕鯨船は他に無く、船員たちはニシン漁の稼ぎ時に間に合うように帰港できるか心配しており、その件で、Craigie 船長に苦情を述べるらしい。船長は短気だが、私の話はよく聞いてくれるので、私も夕食時に話そうと思う。

午後9時-船長と話をした。結果は不満であるが、話を聞いてはくれた。私が話し終わると、彼は室内を行ったり来たりし、そして友愛の情をもって「君を連れて来て後悔している；船の北には鯨がたくさんいるので、離れられない；自分はどうなってもいいが、君を危険にさらすことになり申し訳ない」等と話した。更に、私の婚約者のことを話に添えたので、私がロケットに入れている婚約者、Flora の写真を見せると、彼は突然、激怒し、「お前の幸せが私に関係あるのか、彼女が私にとって大事なのか」等と叫び、部屋を出て行った。船長が私に怒りを示したのはこれが初めてだった。

船長は背が高く、たくましく、浅黒く整った顔をしていた。目が特徴的で、時々恐怖の感情が表れ、そうすると怒ることが多かった。彼も自覚しており、そんな時はよく自室にこもっていた。30歳余りであろうが、髪とひげには白いものが混じり、大きな悲しみに遭った結果だと思われた。船が強風に襲われ危険な時に、彼は楽しそうに操船しており、死が自分にとっては喜ばしいと話したことも何度かあった。

9月12日-朝食時、船長は昨日のことを詫びた。ただ、少しうわの空のような感じだった。彼のことを主任機関士は何かにかかっていると言っ

たし、ケルト人船員は予言者等と噂していた。

この航海中、船の後方から悲しげな叫び声が聞こえると言い出した者がおり、それが船員に広まった。結果、深夜の当直を決めるのが困難になるほどだった。何かの音の聞き間違いのほずであるが、その音を聞かせようとした船員に私も就寝中に起こされ、無駄足を踏んだこともあった。船員たちの迷信に船長も動揺したようだった。

二等航海士の Manson が昨夜、幽霊を見たと話した。彼は船が何かに憑かれている等と言い、とてもおびえていたので、私は薬を処方した。彼の話は「深夜の当直中、銃撃ちの John M'Leod が船首側からやってきて、右の方から声がすると言った。私も船首側に行きそれを聞いた。月明かりの中、声がした所に白いものを見た。銃をもって氷上に下り、そちらへ行った。熊ではなく、白く背の高い何かだった。私は船へ逃げ帰った。」等々。私は熊を見誤っただけだと思うが、彼は否定した。この話も船員に広まり、彼らは不満をより強くした。

船は留まっていたが、好ましいことに南の流水群が部分的に流れ去っていた。

9月13日-一等航海士の Milne によると、船長は船員の間でも謎の人物だそうだ。彼の話では、船長は航海が終わると姿を消し、次の時期まで現れなかった；町に友人はおらず、その過去を知る者もいなかった；捕鯨船に乗るのは、それが危険だからで、船長は死を求めている；船長が現れない年があったが、ロシア・トルコ戦争があった年で、その翌年、船長が現れた時には首に傷があり、戦争に参加していたのだろう等々。

流水の隙間が狭くなったようだが、船長はずっと見張り台にあり、望遠鏡を覗いていた。

午後7時30分-船長は狂人であるとの結論に達した。1時間前、船橋にいた彼が興奮して私の所にやってきた。私の手首をつかみ、「見ろ、あそこだ、彼女が見えるだろう、行ってしまった」

等と言った。私は憔悴した彼を船室のソファーに寝かせ、ブランデーを与えた。彼は身を起こし、私と2人だけなのを確認すると、「君も見ただろう」等と尋ねてきた。私が「何も見なかった」等と答えると、「望遠鏡無しでは無理だ」等と言った。しばらくして、私に「自分は気が狂っていると思うか」と尋ねたので、「船長の心に何かがあり、それが興奮をもたらし、自身を損なわせている」等と答えた。更に、狂気の症状について尋ねられたので、説明すると、途中、その中の「幻覚」のことを尋ねてきた。私が「そこに無いものをあると思うのが幻覚だ」と答えると、船長は「彼女はあそこにいた」等と言い、立ち上がり自室に戻った。

南風になり、流水が水路をふさぐかも知れない。私は神に祈った。

9月14日-船は氷に囲まれてしまった。狐を見かけたが、船には寄って来なかった。そのことで、ますます船員たちは船に呪いがかかっているという迷信を噂した。午後、船長が甲板に約30分姿を見せ、昨日何かを見た場所を見つめていた。それ以外、彼は部屋にこもっていた。日曜なので、礼拝式があり、機関長が英国国教会の祈祷書の言葉を読み上げた。船員はカトリックか長老派だけなので、奇妙だが、不公平ではなく合理的だった。

夕焼けがすばらしく、恐ろしいほど赤かった。風向きが変わっていた。

9月15日-婚約者の Flora の誕生日である。早朝、船長が現れ、私に「あれは妄想ではなかった；すべて大丈夫だ」等と言った。朝食後、彼に残りの食料を調べるよう言われ、制限すれば、18~20日はもつ旨の報告をした。船長は船員全員を集め、「今の状況に不満かも知れないが、過去、我が船ほど収穫が多い船は無かった。そのおかげで、全員が貧しさに困ることなく生活できた。それで全員が私に感謝すべきだと思うなら、仕事にも感謝して従事すべきだ。今、新たな冒険をしているが、失敗して氷原を歩いて帰るよう

なことにはならないだろう。3週間以内には全員がスコットランドの海岸に到着できるだろう。食料の配給を減らす、過去に多くの危機を乗り越えてきたように、この危機も乗り越えよう。」等と呼びかけた。この時の船長は堂々としており、船員すべてがその言に賛同した。

9月16日-北風が変わり、氷に隙間ができそうだった。船長も船員も陽気だった。自室には誰も入らせない船長が、驚いたことに私に鍵を渡し、時計を取って来てくれと頼んだ。船長の部屋で印象に残ったのは、若い女性の肖像画だった。隅に「M. B., aet. 19.」と書かれ、その女性は高潔ではかなく、意志の強さを感じさせた。

午後11時20分-船長と話をした。彼はすぐれた読書家で、魂について話し、アリストテレスから現代の心靈主義まで議論した。

北風が強くなっている。

9月17日-3人が幽霊を見たと言った。朝食後、その1人の Milne に吹聴しないよう忠告したが、「白いものが叫びながら宙を漂っていた」等と言った。この話が船長の耳に入ると、昨夜とは別人のようになり、甲板を歩き回り、時々両腕を広げ何かつぶやいていた。

氷に水の筋が入り、緩み始めていた。

午後12時-私はブランデーで少し落ち着いていた。就寝前、甲板でパイプを吸っていた時、真下から高く鋭い声が聞こえ、上の方まで上がり恐ろしい叫びとなった。何も見えず、震えながら自室に戻った。明日になれば大丈夫だろう。

9月18日-不安で落ち着かなかった。船長には話さなかったが、彼は不安で興奮し、じっとしてられないようだった。朝、水路ができていたので船を進めた。12マイル進んだ所で、巨大な浮氷にあたった。停船して氷が緩むのを待った。船員は抜けられると思っていたが、船長は違うようだった。夕食後、彼は私に「安心してはいけない」等と言い、自分にもしものことがあれば、私物は処分して船員たちに平等に分け、時計は私が引き取るよう話した。私をも

しもの時のことを話そうとすると、彼は「若者がそんなことを話すのは聞きたくない」等と遮った。彼の言葉に不安を感じ、彼の行動により注意を払うようにした。この話を Milne にしたが、彼は船長の言葉についても、船の状況についても楽観していた。

船長がいなくなってしまう。9月19日朝7時、船長の捜索から帰って来た。彼が不明になった状況を記す。先の会話の後、彼の行動は神経質になり、私は彼が甲板に出るたびに後を追った。夕食後も彼は甲板に出、私も後を追った。彼は船尾で霧の渦巻きを見ていた。彼は「こちらだ」等と言うと、それに向かって船から飛び下り走り出した。私は動けず、彼の姿を目で追っただけだった。月が氷原の上を照らした時、小さな黒い点が見え、それが最後の姿だった。私も加わった捜索隊が組織されたが、発見できなかった。

午後7時30分-2回目の捜索から帰船した。船員たちは船長は死んだと言い、船の出発を主張した。私と Milne は彼らに、明晩必ず出発することを約束して、もう1回捜索することにした。

9月20日午後-今朝の捜索で、浮氷の端まで進もうとした時、1人が黒い点を発見し、近づくと船長の遺体だった。我々が近づいた時、風が船長の体に積もっていた雪と氷を巻き上げた。一部が船長の体に落ちたが、また風に巻き上げられ、海へと飛んで行った。それを見た多くが、光る雪の細片が女性の形をして、屈んで船長にキスし飛び去ったと言った。船長は両腕を広げ、顔には笑みを浮かべていた。午後、船長を船旗でくるみ、砲丸を足に結び付け、水葬に附した。私は葬送の祈りを読み、船員たちは子供のように泣いた。

夜、船長の所持品を表にするため、彼の部屋に入った。前と変わっていなかったが、唯一、女性の肖像画が額縁に沿って切り取られていた。

[John M`Alister Ray の父による付言-北極星号の船長の死に関する出来事をこの日記によって

知った。この内容が正確なことは疑いないが、ありそうもないことなので、私は公刊には反対していた。しかし、最近、P 医師と会い、この話をした。彼は登場人物のことを知っていると言い、彼の話す人物の特徴は息子の日記と一致した。P 医師によると、船長は美しい女性と婚約していたが、彼女は船長が海に出ている時に、悲惨な状況下で亡くなったそうである。]

Doyle 自身が船医として長期航海に出た体験があるそうなので、それも活かされた怪奇物語となっている。怪奇現象がなぜ、船長が陸で1人である時に起こらず、他の船員を危険に巻き込む恐れのある航海中に起こったのか、疑問が残る。立派だった故人が関係する現象ならば、無関係の生きている他者を巻き込むことは本意ではないだろう。

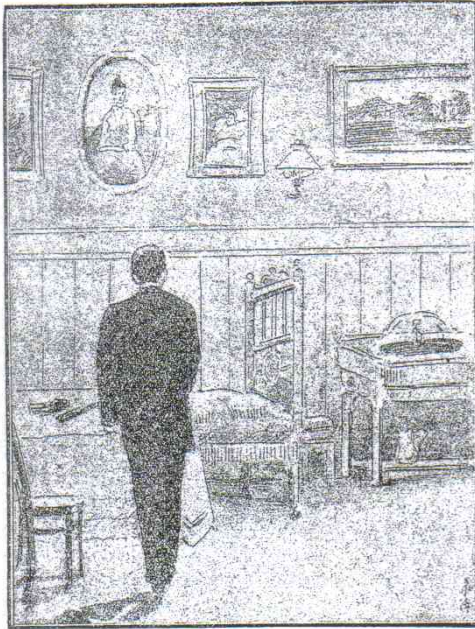
3

翻訳について述べる。まず、中国語訳が拠ったのは、雑誌が短篇集かが問題になる。両者で大きく異なる部分は前書きのみである*3。それが翻訳では省略されているので、判断するための決定的な証拠は無い。ただ、過去の雑誌は入手しにくいという理由から、翻訳は短篇集に拠ると考え、以下の引用はすべて短篇集を使用する。

他に訳されていた場合の原作探求の手掛りになると思うので、主な固有名詞の対照表を掲げる。

原作	中国語訳
John M`Alister Ray	亞里
Craigie	克雷支
Manson	漫生
Milne	迷倫
Spitzbergen	司批子伯梗(1頁), 士斐子伯更(5頁)

書名について、「The Captain of the "Polestar"」(「北極星号」の船長)を、「氷洋鬼嘯」(氷の海の幽霊の叫び)としている。翻訳は書名から



怪異譚であることを示しているが、改訳しなくてもいいと思う。

訳者とは無関係だと思うが、翻訳9頁に挿絵がある。室内で女性の肖像画を見る男性の後ろ姿である。船長の部屋に入り女性の肖像画に目を奪われた私の場面であろう。ただ、部屋が大きすぎる(天井が高すぎる)。どんなに豪華な捕鯨船なのだ、と思ってしまう。原作(雑誌・短篇集とも)には一切、挿絵が無いので、すばらしいことなのだが、この絵にはいい評価を与えられない。

内容については、省略が多いことが言える。原作には前書きと後書きがあり、どちらも物語の背景の説明と物語に真実味を帯びさせる役割を担っており、欠かせない部分だと思うのだが、翻訳は両者ともすべて省略している。改訳(或は誤訳)も少し見られる。

改訳部分を挙げる。9月14日の狐が現れる場面である。

Our only visitor was an Arctic fox, a rare animal upon the pack, though common enough upon the land. He did not come near the ship, however, but after surveying us from

a distance fled rapidly across the ice. This was curious conduct, as they generally know nothing of man, and being of an inquisitive nature, become so familiar that they are easily captured. Incredible as it may seem, even this little incident produced a bad effect upon the crew. "Yon puir beastie kens mair, ay, an' sees mair nor you nor me!" was the comment of one of the leading harpooners, and the others nodded their acquiescence. It is vain to attempt to argue against such puerile superstition. They have made up their minds that there is a curse upon the ship, and nothing will ever persuade them to the contrary.(16頁)

(唯一の客が北極狐だった。極地では珍しい動物だが、叢氷のうえで見かけることはあまりなかった。しかし狐は船の近くまではやってこなかった。遠くから我々のようすを窺って、それから急いで走り去った。それは奇妙な行動だった。北極狐というものはたいがい人間を知らない。そして生来好奇心が強い。だから、恐れるふうもなく人間に近づいてくるので、簡単に捕まえることができるはずだった。驚くべきことに、そんな小さな出来事ですら、乗組員たちに悪い影響を及ぼした。「あの、ちっぽけな獣(けだもの)は知っとる、そうやね、自分(わつし)やお前(めえ)に見えねえ物(もん)まで、見よるよ」それが銛撃ちのなかでも主たる人物の言葉だった。ほかの者はみんなその言葉に異は唱えなかった。そうした子供っぽい迷信が無意味であることを納得させようとするのは、時間の無駄以外のなにものでもなかった。乗組員たちは船に呪いがかけられていると決めこんでいた。その意見を変えさせるのは何をもってしても不可能であることは明らかだった。(54-55頁)*4)

眼中所觸。惟北氷洋之狐狸。然亦罕覩之物。此物多疑。不敢近余舟。但驚矚即逝。若以力取之。尚復易易。以生不見人。不知人之有機也。此時舵工怨聲徹天。且言聞鬼聲。而見狐狸均非吉徵。余力與之辯。斥爲迷信。衆皆不懌。決爲非祥。(7頁,句点は原文のまま,以下同)

(目に入ってくるものは、北の氷の海にいる狐だけで、それもめったに見ないものである。狐は警戒心が強く、我々の船に近づこうとしなかった。ただびくびくして遠くから眺めており、すぐには去ってしまった。もし捕えようと思えば、簡単であろう、平常、人に会わないから、人の考えがわからないからである。この時、舵手の怨み言は天まで届くほどだった。彼らは、幽霊の声を聞き、そして狐の姿を見た、どちらも吉兆ではない、と話した。私は説得に努め、迷信だと退けたが、彼らは皆不服で、もっと悪いことの前ぶれだと言った。)

原作は、狐の方が船に寄って来ないのを不吉だとしているのに、翻訳は、人の方が狐を見たのを不吉だとしている。中国の読者にわかりやすくするための改訳であろうか。また、省略の多さも目立っている。

省略のため、意味が通じにくくなっている箇所を挙げる。9月18日の船長との会話部分である。

“ I suppose you think it's all right now, Doctor? ” he said, as we sat together after dinner.

“ I hope so, ” I answered.

“ We mustn't be too sure - and yet no doubt you are right. We'll all be in the arms of our own true loves before long, lad, won't we? But we mustn't be too sure - we mustn't be too sure. ”

He sat silent a little, swinging his leg thoughtfully backwards and forwards. “ Look here, ” he continued; “ it's a dangerous place this, even at its best - a treacherous, dangerous place. I have known men cut off very suddenly in a land like this. A slip would do it sometimes - a single slip, and down you go through a crack, and only a bubble on the green water to show where it was that you sank. It's a queer thing, ” he continued with a nervous laugh, “ but all the years I've been in this country I never once thought of making a will - not that I have anything to leave in particular, but still when a man is exposed to danger he should have everything arranged and ready - don't you think so? ”

“ Certainly, ” I answered, wondering what on earth he was driving at.

“ He feels better for knowing it's all settled, ” he went on. “ Now if anything should ever befall me, I hope that you will look after things for me.....(27-28頁)

(「もう大丈夫だと思ってるんじゃないかね、先生」夕食を終えた時、船長は云った。

「そうだと好いなと思ってます」僕は答えた。

「安心しすぎではいけない - 疑いなく先生の考えは正しいがね。もう少ししたら我々はみんな愛する者の腕のなかにいる。お若い先生、そう考えているだろう? しかし、安心しすぎではいけない - 安心しすぎではいけない」

船長はしばらく口を噤んだ。足をぶらぶらさせながら何か考えているようだった。

「そう」と、船長はふたたび口を開いた。

「ここは危険な場所だ。一番安全な時でさえ、油断がならず、剣呑だ。おれはこういう場所でいきなり消えた人間を何人も知っている。足を滑らせるだけでそうなる - ちょ

と足を滑らせる。裂け目が待っている。緑の海の泡がただ沈んでいく場所を示す。とんでもないことだ」神経質な笑いを挿みながら船長はつづけた。「しかし、何度もこの場所に来ているが、おれはまだ遺言状を書こうと思ったことはない - 特別に遺すものがあるというわけではないが、それでも危険にさらされた時、人は身の廻りのことを改めて考えて、準備するものだ - そうは思わないかね?」

「そうかもしれませんね」いったい何を云おうとしているのか考えながら、僕はそう答えた。

「人はすべての手筈が調っていることを知っておきたいものだ。もし、おれに何かあったら、その後の面倒は先生に見てほしい。……(65-66頁)」

飯時謂余曰：“大夫以爲吾舟可出險矣。”

余曰：“然。”

船主曰：“此行尚無把握。幸勿大張歸興。謂一至鄉井。即抱所歡於懷上。寫其闕衷。”語後以首抵艙壁。二足伸縮無恒。若有所念。即曰：“吾舟所停地頗險。吾前此數經其地。未嘗憂惶。”

余曰：“然。”私念胡有此語。

船主曰：“吾意甚願就死。吾果有不測。身後之物。大夫幸爲我檢點。……(10頁,コロン・引用符は補った)

(船長が)食事中に私に「先生はこの船が危機を脱したと思っていますか?」

私は「はい。」

船長は「この航海はまだ安心できない。帰る気持ちを前面に押し出すのはやめてもらいたい、故郷に着けば、愛する者を胸に抱き、心に思うことを言い表すなどということだ。」そう話すと、首を壁につけ、両足をしばらく曲げ伸ばしして何か考えているようだった。そして「この船が停まってい

る所はとても危険だ。私は以前、このような所を通過したことが何度もあるが、不安に感じたことはなかった。」

私は「そうですか」と言い、何が言いたいのだろうと思った。

船長は「私はとても死を望んでいる。私に不測の事態があれば、所持品について先生に点検をお願いしたい。……)」

原作も唐突な感じだが、翻訳は省略が多く、前後がつながらなくなっている。

4

本作の最初の日本語訳は、『世界怪談名作集』(世界大衆文學全集35,改造社, 1929.8)所収の岡本綺堂訳『北極星号の船長』だそうである。それに比べると、中国語訳ははるかに早い登場である。

しかし、上述したが、中国語訳は原作の後書きを省略している。その後書きに述べる、船長の婚約者の悲劇的な死が、船に現れる幽霊との重要な接点である。それを省略してしまっただけでなく、なぜ幽霊が現れるのかや幽霊の正体は何なのか、更には、船長がなぜ死を望むように見えるのか、なぜ幽霊に魅せられたのか等も全くわからなくなると思う。

原作は Doyle の初期作品で、それに注目した訳者はセンスがいいと思う。ただ、省略のために原作の味を大いに損なっている翻訳は、お世辞にもいい出来とは言えず、なおさら残念である。 罫

【注】

- 1) 雑誌と短篇集ともに、インターネットサイト「Google books」で公開されているテキストを使用した。原作名は、短篇集に拠る。雑誌掲載は『The Captain of the ' Pole-star '』とする。また、雑誌掲載には作者名が記されていない。
- 2) 以下の2作の日本語訳を参照した。延原謙訳『ボ

ールスター号船長』(『ドイル傑作集(II)-海洋奇談編-』(新潮社, 1958.8.20初版/2007.8.30四十六刷改版/2011.12.30四十八刷)収)、西崎憲訳『北極星号の船長』(北原尚彦・西崎憲編『北極星号の船長 ドイル傑作集2』(東京創元社, 2004.12.10)収 初出同編『ドイル傑作選2(ホラー・SF 篇)』(翔泳社, 2000.2)収)

3) 余談であるが、この前書きの違いから、参照した日本語訳は共に短篇集に基づいたと推測できる。

雑誌-[Being an extract from the journal of John McAlister Ray, student of medicine, kept by him during the six months' voyage in the Arctic Seas, of the steam-whaler ' Pole-star, ' of Dundee, Captain Nicholas Craigie.](33頁)

(医学生 John McAlister Ray の日記からの抜粋、Dundee の Nicholas Craigie 船長の蒸気捕鯨船「Pole-star(北極星)」の、北極海での6か月の航海中、彼によって記された)

短篇集-[Being an extract from the singular journal of John M' Alister Ray, student of medicine.](1頁)

延原訳-医学生ジョン・マリスター・レイの異常な日記からの抜粋。(35頁)

西崎訳-[以下は医学生ジョン・マカリスター・レイの不可思議な日記からの抜粋である](40頁)

4) 原作の日本語訳は西崎憲訳を引用した。訛りを表すためのルビは()に入れた。

【参考文献・ホームページ(HP)】

阿英著, 飯塚朗・中野美代子訳『晚清小説史』(東洋文庫349, 平凡社, 1979.2.23)

コナン・ドイル著, 北原尚彦・西崎憲編『北極星号の船長 ドイル傑作集2』(東京創元社, 2004.12.10)

コナン・ドイル著, 延原謙訳『ドイル傑作集(II)-海洋奇談編-』(新潮社, 1958.8.20初版/2007.8.30四十六刷改版/2011.12.30四十八刷)

樽本照雄「漢訳コナン・ドイル小説目録」, 『漢訳ホームズ論集』(大阪経済大学研究叢書第52冊, 樽本照雄著, 汲古書院, 2006.9)「附録」

William G.Contento 編「The FictionMags Index」

<http://www.philsp.com/homeville/FMI/0start.htm> (2014年7月10日確認)

N・M卿管理「ミステリー・推理小説データベース Aga-Search(アガ・サーチ)」

<http://www.aga-search.com/> (2014年7月10日確認)

「Google books」 <http://books.google.co.jp/> (2014年7月10日確認)

吳效剛『民国時期查禁文学史論』

北京・中国社会科学出版社2013.12

緒論、

第1章 抑制新文学 1912-1927年の查禁文学、

第2章 困窮左翼文学 1927-1937年の查禁文学、

第3章 抗衡大衆文藝 1937-1945年の查禁文学、

第4章 反制主流文学 1945-1949年の查禁文学、

第5章 結論、

附録：民国時期查禁文学書刊目録、

参考書目

『中国現代文学研究叢刊』2014年第3期(総第176期)

2014.3.15

作為異文化体験的“梁啓超遊美” 重読《新大

陸遊記》……………李書磊

“黄種”与晚清中国的烏托邦想像……………李広益

晚清白話翻譯文体与文化身份的建構 以吳禱漢

訳《侠黒奴》為中心……………崔琦

劉鶚為《鄰女語》作者考論……………陸楠楠

『中国現代文学研究叢刊』2014年第4期(総第177期)

2014.4.15

胡適早期翻譯小説《決闘》的文化解読……………李宗剛

『中国現代文学研究叢刊』2014年第7期(総第180期)

2014.7.15

關於文学編年史現象的思考……………劉勇

《黒奴籟天録》：春柳社与中国話劇の孕育…盧付林

晚清小说家“天公”考略

谢 仁 敏

一、“天公”非陆士谔考

“天公”在晚清间是一位较为活跃的作家，其重要的代表作有两部：一为《最近官场秘密史》（亦称《官场秘密史》），前后两编，署“著作天公，校者慧珠”；一为《最近女界秘密史》（亦称《女界秘密史》），初集上编署“春江香梦词人编，南浦慧珠女士评”，初集下编署“著作者天公”。这两部小说皆出版于宣统二年（1910），上海新新小说社印行，鸿文书局发售。关于小说作者“天公”到底是谁，在相当长的一段时期内都是不解之谜。1993年，百花文艺出版社出版了一部《社会官场秘密史》¹，该书实际上是陆士谔的《最近社会秘密史》与“天公”的《最近官场秘密史》的合编本，编者似乎暗示了“天公”可能就是陆士谔。随后，王学钧先生在《实录与评论：晚清陆士谔社会小说论》一文中云：

总起来说，陆士谔的社会小说就是自觉地作为“史”来写的。《上海秘密史》、《女界秘密史》、《官场秘密史》、《女界风流史》、《鬼国史》、《最近社会秘密史》等等，题目上就标明了“史”，但它又是小说。²

王先生在此已经将《最近官场秘密史》和《最近女界秘密史》都划归到了陆士谔名下，也意味着“天公”就是陆士谔，遗憾的是该文中并未说明缘由。笔者估计，王先生这一判断，可能依据的是陆士谔《十尾龟》中的一段对话：

耕心更笑得弯腰打跌，好一会才道：“……有部新出的《最近女界秘密史》小说，拉马的事情叙述得要算清楚了，你难道没有瞧过不成。”

金哥道：“甚么《最近女界秘密史》？我在湖州听都没有听人家讲过。”

耕心道：“怪不得你这样不开通，连这点子新知识都没有。现在瞧新小说，是最要紧一件事情。一切稀奇古怪新鲜事故，新小说里头竟没一件不有，并且都载叙的明明白白。就是我方才说的那部《女界秘密史》是三大秘密书里头的一种。”

金哥道：“甚么三大秘密书？”

耕心道：“就是上海鸿文书局出版《上海秘密史》、《女界秘密史》、《官场秘密史》三种秘密小说。《上海秘密史》专讲上海地方各种说不出、料不到的稀奇古怪事情。《女界秘密史》是专讲女界的。《官场秘密史》是专讲官场的。”³

王先生在论文中引用到了这段文字，因此对其中提到的“三大秘密书”不可能不有所关注。这三大“秘密书”同属一个系列，而且《上海秘密史》的确由陆士谔所著，再根据陆士谔经常使用“自我推介”的一贯做法，人们的第一反应当然是推断这三部作品都出自陆氏之手。不过，此处的推断似乎并不可靠，其原因有二：

其一，这毕竟是小说中的人物对话，可以

¹ 金刚、常庚整理：《社会官场秘密史》，百花文艺出版社，1993年。

² 王学钧：《实录与评论：晚清陆士谔社会小说论》，

《明清小说研究》，2001年第1期。

³ 陆士谔：《十尾龟》第十一回，新新小说社，宣统三年（1911）。

作为查证的线索或者结论的辅证，但似乎不便直接当作确凿的史料使用。

其二，虽然都属“秘密史”系列，但人物对话中始终没有直接点明《女界秘密史》、《官场秘密史》的作者就是陆士谔，故不排除是其他作家的可能。在晚清时代，发行机构出版某一系列小说，作者各不相同的情况并非鲜见。例如改良小说社在宣统元年（1909）推出的“风流案”系列——《军界风流案》（梦天著）、《官场风流案》（董狐著）、《学界风流案》（天梦著），其作者就并非同一人；随后，该社又推出了“繁华梦”系列，其中的《新繁华梦》（不梦子著）、《苏州繁华梦》（天梦著）和《北京繁华梦》（夏侣兰著），其作者亦非同一人。

就在王学钧先生这篇论文发表的同一年，田若虹女士也发表了考证文章《陆士谔“三大秘密史”》⁴。该文考证的结论跟王先生的一致，都认定“天公”即是陆士谔，其证据如下：

证据一：也是根据陆士谔《十尾龟》第十一回中耕心与金哥的那段对话。

证据二：陆士谔创作有同类题材的小说《女界风流史》。

按：晚清间涉足女界怪现象题材的作家、作品众多，并非只有陆士谔一人。如新阳蹉跎子所著的《最近女界鬼域记》（一名《女界现形记》）、八宝王郎（王浚卿）所著的《女界烂污史》（一名《东厕牡丹》）等等。若单单因为陆士谔曾经创作过《女界风流史》，就断定《最近女界秘密史》也必定是他所作，恐怕难以令人信服。

证据三：使用了不少《商界现形记》的小说内容做引证材料。

按：笔者在上文已经说明，以小说内容作史料，可信度要打折扣，而且《商界现形记》是否真是陆士谔所著依然有待证实。⁵假设，《商界

现形记》真是陆士谔所著，田文所提供的一些证据依然不够充分。比如，《商界现形记》十三回里有云：“金印道：‘……编起小说来，倒不是官场秘密史绝好的材料吗？……他只怕第九集官场秘密史里头就要及第了。’”这是小说人物金印对三姨太太说的一段话，其中的“他”指的是“鸡皮三少”而非陆士谔。陆士谔惯常使用“自我推介法”，若涉及自己的相关作品时，一般都当仁不让地直接提及自己的名字或别署，以扩大宣传效果。又如，田文也注意到《商界现形记》第十六回中，出现了一大段介绍“天公”生平、交游的信息，但跟陆士谔的相关情况比后发现，两者几乎没有什么相似之处。而田文对这一矛盾现象的解释是陆士谔在“故弄玄虚”，不排除这种可能性，不过以此为据就下断论似乎还是令人难以信服。

证据四：《最近官场秘密史》中出现了一个人物名叫刘梦花，而陆士谔小说《新上海》里有一个人物叫钱梦花，名字有点相似；并且一个精通外交，一个在外国人身边当“细者”，在工作上也有些相似。但若仅以此“相似”就推断两部作品的作者为同一个人，结论并不可靠。

综上所述，无论是王学钧先生还是田若虹女士，二人断定“天公”就是陆士谔的证据都显不足（或许王先生另有所本）。那么，“天公”跟陆士谔是否是同一人呢？如果不是，“天公”又

但阿英《晚清戏曲小说目》中将《商界现形记》的作者标为“云间天赘生著”，此后学界多从之。近年，陈年希、田若虹等学人考证认为，云间天赘生就是陆士谔，于是又将该小说划归到陆氏名下。笔者对此存疑：其一，“云间天赘生”是否真是陆士谔，尚不敢确定，至少无直接的有力证据；其二，即使“云间天赘生”就是陆士谔本人，但他只是个“编辑者”，而在该书的版权业上，赫然题有“著作者：百业公”，遗憾的是这一细节往往被学界所忽视（田若虹虽然提到了这一细节，却回避了“百业公”与“云间天赘生”之间的关系这一关键性问题）。因此，除非有证据证明“百业公”就是“云间天赘生”或是陆士谔，否则，该书的著作权归百业公所有似乎更为妥当。

⁴ 田若虹：《陆士谔“三大秘密史”》，日本《清末小説から》第63期，2001年4月。该文随后收入她的《陆士谔小说考证》（上海三联出版社，2005年版）之中。

⁵ 按：《商界现形记》书中题“编辑者：云间天赘生”。

到底是谁？笔者带着疑问查阅了相关资料。

查阅《最近官场秘密史》前编，发现存有一篇序言，文末题“宣统二年岁在庚戌古沪顾德明在新序”。顾序末云：

于是天略先生秉董生之笔，燃温峤之犀，聚十年之近事，成百炼之鸿文。后起者秀，有公评在。

这里，顾德明明确指出《最近官场秘密史》的作者乃是“天略”，意即“天公”就是“天略”。不过，这里虽然提供了线索，但依然无法排除天略跟陆士谔乃是同一人之可能。在《最近官场秘密史》“卷之一”篇首，即小说正文开篇之前，还有一篇“天公”的“自叙”，其中透露了一些非常重要的作者生平信息：

余齿卑任性，话言无忌，文字不谨，致攫贵人之怒。既不容于朝，乃去而之野。东奔西逐，阅百十度月圆月缺，需时不谓不暂。眼界胸襟，繇之大展，祸福倚伏，几微消长之理，亦繇之而悟澈，乃者归去来兮，息影于古龙门里之老屋中，一几一榻，一纸一笔，无丝竹之乱耳。饶余乐之可寻，自春徂秋，成三十万言，立体仿诸稗史，纪事出以方言。恰与伯元所铸，有笙磬同音之故，名之曰《最近官场秘密史》，非敢有所借也。

由这段自叙得知，作者曾经入朝为官，后因放言无忌惹怒贵人，只好退隐江湖。随后居于古龙门老屋中，潜心创作《最近官场秘密史》。小说正文中，“天公”又多次以自叙方式向读者透露个人的生平信息，略举一二：

按官场中，讳敲竹杠的名儿，叫做“伸手”。……此说似乎相近，然而其实却又不然，何也呢？做书的在少年时代从三吴两越间逆流而上，直至两川，跑了十年，无非是帮人家打算伸手的交道。当初帮人家伸

手，似乎比别人的手伸的长些，所以东家的项珠不作兴不变色的。红的变不成绿的，总要变成了才肯歇手。（卷之十九）

你道这迷药又是做书的，故神真说了，不过我们苏松常镇一带，是没有的，所以听了以为诧异。至于西北边陲，瑶苗峒番杂处的去处，却视以为寻常……大家也知道了，不似我们苏松一带的人，听了也有些半信半疑哩。若说这种迷药凑合起来，非常容易，并无希奇难致的东西。做书的当年到宁夏去，那里是接近苗瑶的所在，传授了解决的法子。（卷之二十）

“天公”自云“做书是第一件郑重的事体，规矩的营生”，不会“作兴游腔滑调的捉弄几句”，意即自己所叙之事皆有所本。整合以上信息可知，“天公”应为吴越一带人，年轻时到过两川（即东川、西川的合称，巴蜀属地）谋生，还曾游历过宁夏等地。再看陆士谔的生平大略。《新上海》中陆氏自叙云：“在下十四岁到上海，十七岁回青浦，二十岁再到上海，到如今又是十多年了。”⁶随后的《社会秘密史》中，小说开篇的第一句就是：“呵呵，在下陆士谔，侨寓上海，屈指算来已有十多个年头。”⁷对比可知，陆士谔与“天公”除了出生地相近之外，其他如当官、辞官，游历两川、宁夏等，当时年仅31岁的陆氏都没有经历过，这就意味着天略与陆士谔并非同一人。不过，这里使用的部分材料来自小说家言，可信度略打折扣，还需要更多证据方能作出断论。

宣统元年（1909），新新小说社出版了一部《最近女界现形记》，题“编辑者：南浦慧珠女士，校字者：春江香梦词人”。小说第二集第二回中提到了一位“天公”先生。其中的几条关键

⁶ 陆士谔：《绘图新上海》第三十回，改良小说社，宣统元年（1909）。

⁷ 陆士谔：《社会秘密史》第一回，新新小说社，宣统二年（1910）。

信息是：其一，有副对联的“下款写着‘古龙门经天氏书馔’”；其二，有幅诗笺“写得也是狼整齐的小楷，仿佛是经天公的笔迹”；其三，从诗笺内容看，“这口气不是经天略先生哩”。这里明确将“古龙门”、“经天略”、“天公”等串联在一起，其中还提供了一条重要信息：“天公”本姓为“经”。那么，小说中提到的这位“龙门经天略”现实中是否存在？

宣统元年（1909），上海最新小说社推出了一套“说部丛书”，其中有一部《夜花园之历史》（一名《夜花园之奇事》），标“警世小说”，作者署名为“诸夏三郎”。书首有一篇《夜花园之历史序》，由序文内容知作者与诸夏三郎乃至交好友，该序落款题“宣统纪元六月既望龙门经天略书于饮胆楼”。上文已经提到，《最近官场秘密史·自序》中天略自称“息影于古龙门里之老屋中”；《最近女界现形记》中标示为龙门经天略，与此序题署一致。这三则材料共同指向了一个结果：“天公”乃是实有其人，原名当为经天略，署“龙门经天略”，其生平经历与青浦陆士谔并无重叠之处，两人绝非同一人。

其实，以作品内证方式也会发现不少蛛丝马迹。比如，就小说笔调言，陆士谔叙事历来轻松诙谐，极尽嬉笑怒骂之能事，而“天公”则较为庄厚平和。又如，陆士谔惯常使用的叙事策略（营销策略）——“自我推介”法，在《最近官场秘密史》中并无出现：该作篇幅甚大，共两编，总共三十二卷，作者自云“自春徂秋，成三十万言”（实约26万字），文中叙述者虽然经常提到《三国演义》、《野叟曝言》、《倭袍记》、《石头记》、《水浒传》、《官场现形记》等前代和同时代的作品，却对陆士谔的作品及其相关情况只字不提，若小说真是陆氏所作，这一现象无疑令人困惑。

综合以上证据，已可断定“天公”是另有其人，而非青浦陆士谔。

在《最近女界现形记》的开篇，“南浦慧珠女士”（以下简称“慧珠”）作有《赘言》一篇，全文如下：

南浦销魂客，绮年玉貌，惊才绝艳，风流文采，倾倒一时。由孝廉举特科，因缘文字，触怒贵人，几罹于祸。繇是黯淡归来，雄心灰尽，日征逐于红灯深屋间，不作纤紫拖青之想。定公诗云“设想英雄垂莫日，温柔不住任何乡？”客虽非垂莫之年，然大有终老是乡之概。尝窃慕蜀郡成都之间，卖酒浆者之遗风，乃由黄歇浦沂江而上。阅一年，历大江七千里，凡诸闻见，案日记之，得十巨册。慧珠授而读之，觉山川文物，风土人情，种种现状，尽在目前。客固好德，而兼好色者也。故于女子社会交接最多，记之独翔。慧珠尤好事者，以酒食余暇，仿小说家言，成书五集凡二十篇。既竟，遂名之曰《女界现形记》。慧珠识。⁸

“南浦销魂客”曾“孝廉举特科，因缘文字，触怒贵人”，“繇是黯淡归来”，于“深屋间”潜心创作；还曾溯江而上，游历成都等等。细究不难发现，“南浦销魂客”的生平信息，与经天略在《最近官场秘密史》中的自叙是如此的接近。那么“南浦销魂客”是不是就是经天略呢？

从《赘言》看，《最近女界现形记》乃是“慧珠”从“南浦销魂客”处得到日记后改编而成，意即两人曾有交往甚至是合作的关系。上文已经提到，“天公”也与“慧珠”合作完成过一篇小说，名为《最近女界秘密史》。不仅题材相似，而且题名也极为相似，以致曾有粗心者将之混同为一部小说。在《最近女界现形记》中，点校者“香梦词人”还透露“慧珠”是女性，“慧珠”在评点时也称“奴家”、“我辈女界中人”，

⁸ 南浦慧珠女士：《最近女界现形记·赘言》，南浦慧珠女士编辑、春江香梦词人校字：《最近女界现形记》，新新小说社，宣统元年（1909）。

由此可以确定“慧珠”乃是晚清间的一位女作家。⁹ 在不甚开放的晚清时代女子的交际面有限,那么在她有限的交往中,是否有可能认识两位生平经历极为相似,都与之存在合作关系,并且创作有同类题材作品的男性文人?这种万一的巧合不是不可能,不过相信几率应该非常之小。

同样巧合的现象还见于不少细节,比如《最近女界现形记》中称赞一部谈论女权的书——《天公旷议》,而该书在“天公”的《最近官场秘密史》中也有提到并持相同的态度,吊诡的是这部《天公旷议》其实并不常见(该书嵌有“天公”二字,笔者甚至认为这是一部杜撰之作)¹⁰。又如《最近女界现形记》中的主人公福天星,在小说中就是直接以“天公”称之;并且每次谈到经天略时,叙述者对他的各种情况都是了如指掌,而小说的底本正是源自“南浦销魂客”的日记,如此等等。因此,鉴于这些概率极小的巧合和各种蛛丝马迹的契合,笔者推断这位“南浦销魂客”即是经天略本人。

既然号为“南浦销魂客”,可知经天略跟南浦有莫大的关系。南浦即现在的上海市南市区一带,地处旧上海县之东南。再据“息影于古龙门里之老屋中”以及“龙门经天略”这两条信息,笔者果然在上海市找到了“龙门里”这一地名(该名缘于早年所建之龙门书院而得名)。由于南浦龙门里既是经氏出游始发之地,也是辞官归隐之地,并且经氏在比较正式的签署中使用的也是该地名,因此按古人署名惯例经氏应该籍出此地。至此,对经天略的生平信息有了大致了解,现不妨试撰其小传如下:

经天略,字天略,号天公,署龙门经天略、天略先生,别号南浦销魂客。上海南浦龙门里人(现在上海市黄浦区尚文路)。生卒年待考。曾

⁹ 晚清间,署名为“女士”的小说家,并非都是女子之身,例如周作人曾署“萍云女士”、罗普曾署“羽衣女士”等。

¹⁰ 笔者几经查找,并未发现存有《天公旷议》一书,故是否杜撰待考,并就此请教博学者。

以孝廉举特科,后因文字触怒贵人,辞归故里以著书自娱。随后一度致力于小说事业,并出资十万元创办过一所小说社(此条待考)¹¹。曾溯江而上,游历巴蜀、宁夏等地,并顺手记有游历见闻录十卷,后以此为底本改编成长篇小说《最近女界现形记》。同时,还著有长篇小说《最近女界秘密史》、《最近官场秘密史》;另著有短篇小说《怪梦》、《杨三》、《魏葆英》、《二與夫》等。¹²

(作者单位:广西大学文学院)

¹¹ 百业公:《商界现形记》第十六回,商业会社,宣统三年(1911)。由于是小说人物语言叙述,其真实性待考。

¹² 《怪梦》,作者署“天公”,《神州日报》附刊宣统元年(1909)十二月二十六日。《杨三》,作者署“天公”,标“滑稽小说”,《图画日报》宣统二年(1910)正月初七日开始连载,至正月初八日连载毕。《魏葆英》,标“滑稽小说”,作者署“经天略”,《图画日报》宣统二年(1910)正月初九日开始连载,至正月十二日连载毕。《二與夫》,标“醒世小说”,作者署“天略”,《图画日报》宣统二年(1910)正月二十九日开始连载,至二月初六日连载毕。

劉半農譯於《新青年》中及法國短篇小說
翻譯原著補考

古 二 德

劉半農(1891-1934)文學生涯中最深刻的變化發生於《新青年》創辦與他出任北京大學預科教授之期間。1917年初劉譯重點已始，自上海知識界的《小說海》、《小說大觀》、《禮拜六》中轉移至北京文壇。同時，他對法國文學的興趣激增，甚至竟到巴黎留攻讀學語言學。

近年來，雖然劉小慧所撰的《劉半農著譯作品目錄》(附於《父親劉半農》，上海人民出版社，2000年)收羅到不可忽視的重要研究，但所著劉譯目錄殘缺不全。劉小慧所失錄劉譯不多，今補考法譯如下，並鑑定出原書名及略為解釋刊於《新青年》的譯文。

劉半農 刊於《新青年》的短篇小說及詩歌翻譯

自1917年1月至1918年9月之間，劉半農在《新青年》出版的外譯共有四篇短篇小說及八篇詩集。雖然《新青年》亦收錄原著及書名，但前人所輯劉譯短篇小說目錄只有兩篇：一、《歐洲花園》，葡萄牙 Affonso Henriques Silva 原著，原題為 Jardim da Europa (原刊名不詳、作者身份不明，但從內在證據而言，必寫於1916年4月至11月之間)；二、《琴魂》，英國 Margaret M. Merrill 原著，所著 The Soul of the Violin，原刊

於1893年2月《The New England Magazine》第13卷第6號，頁774-776。其餘短篇小說如下：

《磁狗》，刊於1917年1月《新青年》第2卷第5號，頁33-43。據譯者所言，“原篇名 The China Dog. 英人麥道克 J. E. Muddock 原著”。此篇為 Joyce Emmerson Preston Muddock (1843-1934) 的短篇小說，原收於《Stories weird and wonderful》(倫敦，1889年，頁119-132)。該篇以一只鬧鬼的瓷狗為中心，致男主角頓時精神奔潰。

《天明》，刊於1918年2月《新青年》第4卷第2號，頁107-123。據該刊所記，“原文“DAWN”英人 P. L. WILDE 著”。前人初疑著者為 Oscar Wilde*¹，但該篇與 Oscar Wilde 的作品風格不合。所著《DAWN》一篇，是美國戲作家 Percival L. Wilde (1887-1953) 寫作，原刊於1914年9月《The Smart Set. A Magazine of Cleverness》第44號，頁115-123。此篇附有錢玄同的小跋，目的是諷刺林紓的寫作風格及老學者的圈點。

此外，劉半農在《新青年》中亦出版八篇詩集，共有二十一首詩。詩集每附有序跋或註釋，亦附英文原詩、原著及詩名。八種詩歌為：

《靈霞館筆記·愛爾蘭愛國詩人》，刊於1916年10月《新青年》第2卷第2號，頁37-44。包含愛爾蘭民族主義三人的韻文：約瑟柏倫克德 (Joseph Plunkett, 1887-1916) 所著的《The Spark》及《I see His blood upon the rose》、麥克頓那 (Thomas MacDonagh, 1878-1916) 所著的《On a Poet Patriot》、皮亞士 (Patrick Pearse, 1879-1916) 所著的《To his ideal》二章。劉半農所據是《Vanity Fair》雜誌譯本，出於1916年8月(第6卷第4號，頁28)。該刊附有由愛爾蘭語譯成英語的詩集及圖片(插圖一)。

VANITY FAIR

POETRY AND REBELLION

Lyrics by Three of the Sinn Féin Leaders Who Were Shot After the Irish Revolt



PATRICK PEARSE
President of the Irish Free State

ROBERT JOSEPH BUCKNETT
Member of the Sinn Féin Executive

JOSIAS W. SLOAN
Member of the Sinn Féin Executive

THE SPIKE
Bucknetts I need to show
I have not yet shown
When I should be the man
The heart and mind of Ireland

TO HIS DEATH
I have not yet shown
When I should be the man
The heart and mind of Ireland

TO HIS IDEAL
I have not yet shown
When I should be the man
The heart and mind of Ireland



THOMAS MACDONAGH
One of the seven leaders of the Irish revolution

BOYNE BY THOMAS MACDONAGH
Thomas MacDonagh was the last poet to die in the Irish revolution. He was shot on the 12th of May 1916.

TO HIS IDEAL
I have not yet shown
When I should be the man
The heart and mind of Ireland

士 亞 皮

那 頓 克 麥

非 能 視 一 朝 之 成 敗 爲 定 案 歐 戰 既 起 愛 爾 蘭 自 請 暫 罷 內 訌 各 對 外 僑 英 人 許 之 遂 自 組 義 勇 軍 揭 英 吉 利 國 徽 一 反 往 時 行 動 實 則 滯 蓄 勢 力 以 義 勇 軍 爲 將 來 革 命 之 根 基 別 組 一 新 芬 黨 翌 日 即 指 揮 其 事 新 芬 者 於 英 語 爲 The Gaelic 言 自 衛 也 本 年 六 月 一 耶 誕 降 生 節 前 義 勇 軍 起 事 自

愛爾蘭愛國詩人

愛爾蘭地處英倫之西相隔一衣帶水初亦獨立自十二世紀中葉王土獨立爲英王治理二世所敗遂屬英世稱英吉利三島此即一也愛爾蘭多慷慨悲歌之士七百年來革命之聲旋起旋滅者幾於史不勝載至歐戰開端前爭持尤急雖歷史報非徒要其非

愛爾蘭地處英倫之西相隔一衣帶水初亦獨立自十二世紀中葉王土獨立爲英王治理二世所敗遂屬英世稱英吉利三島此即一也愛爾蘭多慷慨悲歌之士七百年來革命之聲旋起旋滅者幾於史不勝載至歐戰開端前爭持尤急雖歷史報非徒要其非

愛爾蘭地處英倫之西相隔一衣帶水初亦獨立自十二世紀中葉王土獨立爲英王治理二世所敗遂屬英世稱英吉利三島此即一也愛爾蘭多慷慨悲歌之士七百年來革命之聲旋起旋滅者幾於史不勝載至歐戰開端前爭持尤急雖歷史報非徒要其非

插圖一：Vanity Fair 書影。

插圖二：《新青年》刊影。



插圖三：The Illustrated London 書影。



插圖四：《新青年》刊影。

我行雪中

(印度歌者HATAN DEVI所唱歌)

劉半農譯。

譯者導言：——兩年前，余得此稿於美國“VANITY FAIR”月刊；嘗以詩賦歌詞各種試譯，均苦為格調所限，不能盡事。今略除前人譯經筆法



HATAN DEVI.

美術及他種學識。

BERNARD SHAW, W.B. YEATS, SIR RABINDRANATH TAGORE 均親夫人為表示印度之魂之 ISIS (埃及女神名，司結黨及興旺者)，從印度而為亞洲之舌，則 HATAN DEVI 必為印度之舌！

寫成之，取其曲折微妙處，易於直達。然亦未能盡懷於懷；意中頗欲自造一完全直譯之文體，以其事甚難，容緩緩“嘗試”之。

此詩篇名，原文不詳。今以首句為題，意非匪古，亦不得已也。

余苦不解梵文；故於篇中專名，有疑以及不可考者，據實附書於後，以俟將來訂定。

“VANITY FAIR”月刊記者之導言：——下錄結構精密之散文詩一章，為有名之 RAJUT 歌者 SRI PARAMAHANSA 所作，其人今在 NEW YORK。此詩自得秀麗由來之 HATAN DEVI 夫人為之歌唱，乃能轟動一時。夫人之夫即印度大學者兼美術評論家之 ANANDA K. COOMASWAMY 博士。夫人今在 NEW YORK 唱歌，其夫則演講印度

發行中

四三三

插圖六：《新青年》刊影。

《印度 SIR RABINDRANATH TAGORE 氏所作無韻詩二章》，刊於1918年8月《新青年》第5卷第2號，頁104-105。附有 Rabindranath Tagore (1861-1941) 的兩首詩：《惡郵差》(The Wicked Postman) 及《著作資格》(The Authorship)。此篇不附英文原版。

《譯詩十九首》，刊於1918年9月《新青年》第5卷第3號，頁229-235。該篇共有7首詩：印度哲學家 Rabindranath Tagore 所著的《海濱》(On the seashore) 及《同情》(Sympathy)；印度政治活動家 Sarojini Naidu 夫人 (1879-1949) 所著的《村歌》(Village Song)《海德辣跋市》(In the Bazaars of Hyderabad) 及《倚樓》(In a latticed balcony)；俄國小說家 Ivan Turgenev (1818-1883) 所著的《狗》(俄語 Sobaka) 及《訪員》(俄語 Korrespondent)。此篇亦不附英文原版，但根據劉半農之註釋，Turgenev 所做散文詩二首皆依賴於 C. Garnett 英譯《Dream tales and prose poems》(紐約，1906年)。

劉半農的法國短篇小說翻譯

法國文學翻譯在清末民初文壇有極大的影響。無論支持或者反對五四運動的新潮，近代小說家及譯者皆受惠於林紘所譯的《茶花女》一書。劉半農不僅重譯該書，而且花費許多時間、精力於編譯法國短篇小說及詩歌。以下列出劉半農所譯的法國作品，共分十九種短篇小說、一種語言學論文、四種哲學詞典的釋義，一種小傳及一種人種學的小筆記，皆原題不記。雖然非小說，但非列不可。此外，劉半農翻譯許多法國詩歌，收於《國外民歌譯第一冊》(北京：北新書局，1927)。此書罕見，筆者未得讀。最後但並非不重要的，據《法國短篇小說集第一冊》(北京：北新書局，1927)在末尾處所附的《劉半農撰譯編校各書》書目，劉半農正計劃編譯《國外民歌譯第二冊》及《法國短篇小說集第二冊》二書，但不知何故從未出版。

《卑田院客》，刊於1915年5月《小說海》第1卷第5號，頁碼不詳。Eugene Marcel Prévost (1862-1941) 原著，所著《Le mendiant》，收於《Le domino jaune》，年份不明。

《玉簪花》，刊於1915年10月《小說大觀》第2集，頁113-122。此書用文言譯成。原著為 W. H. G. C.，不知何人。

《賣花女俠》，刊於1917年6月至12月《小說大觀》第10至12集，頁289-341、255-354、169-312。原著者耶米曹拉 (Émile Zola, 1840-1902)，原題為《Les Mystères de Marseille》，但按照劉半農所譯的書名，其譯據英譯本，《The Flower Girls of Marseille》(Philadelphia: Royal Publishing, 19世紀末，譯者不詳)。

《茶花女》，1926年7月北新書局發行單行本，又名為《茶花女劇本》。原著者小仲馬 (Alexandre

Dumas, fils, 1824-1895), 原名為《La Dame aux camélias》。該書已現兩種譯本：一是林紓所譯的《巴黎茶花女遺事》小說，與王壽昌共譯；二是徐卓呆(1881-1958)於1926年1至4月《小說世界》第13卷第3至第16期所刊的《茶花女》劇本，據日語譯本。劉譯是由法文原本譯出，與徐卓呆同譯劇本。

《貓的天堂》，原刊於1926年12月11日《莽原》第1卷第23期，頁925-934。再出版於《法國短篇小說集第一冊》。原著者曹拉(Émile Zola)，原題為《Le Paradis des Chats》，原刊於1868年11月《La Tribune》。

《戈姆與屍體》，刊於1927年1月5日《世界日報》第7卷第2號，頁碼不詳，收於《法國短篇小說集第一冊》。原著者底得囉(Denis Diderot, 1713-1784)，篇名是劉半農的創作。該故事原出於一封信，註明1765年12月1日，收於《Mémoires, correspondance et ouvrages inédits de Diderot》第二冊，頁317-319(1830年初版)。

《遊地獄記》，刊於1927年1月8日《語絲》第113期，頁1-2。再出版於《法國短篇小說集第一冊》。原著者弗洛倍爾(Gustave Flaubert, 1821-1880)，原題為《Voyage en enfer》，原刊於1836年《Art et Progrès》。

《黑珠》，刊於1927年1月25日《莽原》第2卷第2期，頁68-78。再出版於《法國短篇小說集第一冊》。原著者丹梭(Léon de Tinseau, 1844-1921)，原題為《La perle noire》，收於《Mon oncle Alcide》(1892年初版)，頁95-106。

《愛情的小蘭外套的故事》，刊於1927年2月26日《語絲》第120期，頁3-4，亦收於《法國短篇小說集第一冊》。原著者曹拉(Émile Zola)，原題為《La légende du Petit-Manteau bleu de l'amour》，原刊於1868年6月17日《L'Événement

Illustré》。

《失業》，原刊於1927年3月《莽原》第2卷第5期，頁163-174。再出版於《法國短篇小說集第一冊》。原著者曹拉(Émile Zola)，原題為《Le Lendemain de la crise》，刊於1872年12月22日《Le Corsaire》。按照劉半農所譯的書名，其譯據第二版，出以《Le chômage》(“事業”)為題名，收於《Nouveaux Contes à Ninon》(1874年初版)，頁110-119。

《八巴貝克與法奇囉》，刊於1927年4月1日《語絲》第125期，頁1-3，亦收於《法國短篇小說集第一冊》。原著者服爾德(Voltaire, 1694-1778)，原題為《Bababec et les fakirs》(1750年初版)。

《比打哥兒》，刊於1927年9月《莽原》第2卷第17期，頁641-645，亦收於《法國短篇小說集第一冊》。原著者服爾德(Voltaire)，原題為《Aventure indienne》(1966年初版)。

如下劉譯原刊不明，皆編譯於1927年《法國短篇小說集第一冊》。

《狗約》，原著者拉薩爾(Antoine de la Sale, 1385-1460)，原題為《Le testament cynique》，原收於《Les Cent Nouvelles》第二冊(1733年初版)，頁207-209。

《不幸的情人》及《小兄弟的罪惡》，原著者那法囉(Marguerite de Navarre, 1492-1549)。兩篇題名是劉半農的創作。原書為《L'Heptaméron. Contes de la reine de Navarre》(死後於1558年初版)，共有 Marguerite 的七十二短篇故事。劉半農所譯的故事只有第九章(頁43-49)及第三十一章(頁249-254)。

《若腦與戈蘭》，原著者服爾德(Voltaire)，

原題為《Jeannot et Colin》(1764年初版), 哲學小說。

《克洛特格歐》, 原著者叢俄 (Victor Hugo, 1802-1885), 原題為《Claude Gueux》(1834年初版)。劉譯有缺點, 其篇中有《聖經》多節經文及其他與宗教有關的話, 但譯者曰:“ 這裡是提倡宗教的話, 說世界上最好的一部書是聖書, 我實在不願意譯, 只得請叢俄原諒我”。劉半農所寫の後序刊於1927年6月《莽原》第2卷第11號, 頁401-412。

《夢》, 原著者阿雷費 (Ludovic Halévy, 1834-1908), 原題為《Le Rêve》, 收於《Madame et monsieur Cardinal》(1870年初版), 頁53-71。

《郵電局的女職員》, 原著者阿雷司 (Alphonse Allais, 1854-1905), 原題為《Postes et télégraphes》, 原刊年份不詳。

最後, 筆者欲列出非小說的作品:

《英王查理一世喋血記》, 法國歷史學家 François Guizot (1787-1874), 刊於1915年8月1日《中華小說界》第2卷第8期, 頁31-37。劉譯附有序, 該篇為查理一世 (Charles I, 1600-1649) 小傳, 原收於《Histoire de la révolution d'Angleterre, 1625-1660》(1826-1827年初版)。從內在證據而言:“ Halberdierts ” 此詞出於英譯 (頁432), 法語原版有“ hallebardiers ”(頁360)。因此能確定劉譯據 William Hazlitt 譯本《History of the English Revolution of 1640》(1846年), 頁431-435。

《猥猥人的創世紀》, 法國人種學者 Paul Vial 神父 (1855-1917) 原著, 刊於1927年5月21日《語絲》第132期, 頁1-3。該短篇原名為《Los Lolos. Histoire, religion, moeurs, langue, écriture》(上海, 1898年初版), 劉譯只附一段關於中國

雲南彝族的創世詩, 原名為《Époque de la création du ciel et de la formation de la terre》頁42-56。

《服爾德文抄》, 法國哲學家 Voltaire 原著, 刊於1927年12月1日《北新》第2卷第3號, 頁49-59。這短篇附有四部, 皆解釋與哲學有關的概念:《美》(Beau), 《君主與民主》(États, gouvernemens), 《笑》(Rire) 及《光榮》(Gloire, Glorieux), 皆出於 Voltaire 所寫的《Dictionnaire philosophique》(1764年初版)。

《比較語言學概要》, 法國語言學家保爾帕西原著 (Paul Passy, 1859-1940), 商務印書館1930年2月發行單行本。原題為《Petite phonétique comparée》(1906年初版), 前人已記。

劉半農亦計劃翻譯《漢語字聲實驗錄》(Etude expérimentale sur les tons du chinois) 及《國語運動略史》(Les mouvements de la langue nationale en Chine), 兩篇為劉半農1925年在巴黎所寫的法語論文, 不過最後只翻譯提要, 1925年上海羣益書社印行, 共有16頁。劉小慧所撰的《劉半農著譯作目錄》(頁188) 謂第一篇提要刊於1923年5月28至29日《晨報·副刊》第140至141號, 實誤。筆者推測劉小慧所記的年份為農曆, 非公曆。若此, 該篇原刊於1923年7月11至12日《晨報》第178至179號, 但此期未得讀, 無法確定。第二篇提要原譯於1925年5月25日《時事新報》, 筆者亦未得讀。 罍

2014年3月28日
(Cesar GUARDE)

【注】

- 1) 郭延禮, 中西文化碰撞與近代文學, 山東教育出版社, 濟南, 1999年, 頁162。
- 2) 其次, 劉半農亦寫作《靈霞館筆記·倍那兒 今世女界第一偉人》, 發表於《新青年》1917年8月, 3卷6號, 頁25-36。不過該篇非譯。

早期漢訳ドーデ「最後の授業」4

胡適訳「最後一課」のばあい

神田 一三

その他の論文

沈思「都徳小説的藝術魅力(代序)」(1998)*³⁶がある。

文章題名からして讚美に終始していることがわかる。「最後一課」についても従来の言説をくり返しているだけだ。確認するためにその部分を示す。

「作者は、ふたりの人物(筆者注:フランツ少年とハメル先生)の異なる感情表現をかりて、自己の強烈な愛国の情、および戦争の失敗によって異邦人の手に陥落したアルザス省の人々の悲惨な境遇に対する深い同情とを読者の前にともうまく表現したのだった」(9頁)

「ハメル先生」と訳したのは、もとの文章が「韓麦爾先生」となっているからだ。

ほかも大同小異といわざるをえない。

蘇華「胡適与都徳的《最後一課》」(1998)*³⁷である。

胡適の漢訳が、明確な政治目的をもって導入されたという。ゆえに、日本帝国主義の動きにあわせて漢訳したことを書きつらねる。「以筆舌報国」筆舌で国に報いる。胡適のことばだ。その結果は、中国国内の青年学生のなかに大きな影響を巻き起こし、胡適を侵略に反対し抵抗を宣伝する真の愛国者として見るようになった。

アメリカの大学でフランス語、ドイツ語を学習したという胡適の口述を信用し、わざわざドーデを選択した、と根拠もなく想像して書く。

すでにある評価を継承しているから、次の語句になる。

「小説は、ある小学校の最後のフランス語の授業を枠組みとし、フランス人民の祖国を熱愛し、侵略者を憎悪する高尚な情感をいきいきと描写している」(130頁)。

フランツ少年がアルザス人であることは眼中にない。また、(陳)匪石の漢訳が1903年で最初だとするのは、『中国近代文学大系』の解説を鵜呑みにした誤り。

「胡適「最後一課」の翻訳と、2度にわたる発表は、彼が学術活動中に追求した政治目的の最初の成功した試みであった」(131頁)。これが結論だ。大絶讚だといっていい。

称讚するという結論が先に定められている。ゆえに、付随する胡適の作品評価も讚美になる。

この蘇華論文は、現在読むことのできる胡適「最後一課」評論文の標準的なものだと感じる。

すでに注で触れた韓一宇「都徳《最後一課》漢訳及其社会背景」(2003)がある。

標題のとおり、各種漢訳をあつかう。

ドーデ「最後の授業」が、「愛国主義」という符号で近代中国人百年の経験史と情感史に組み込まれた(138頁)と従来の主張をくり返す。匪石訳については、以前の「偽訳」を捨て普通の「書き換え(改写)」にかえた。それ以外は、新しい部分を見つけることができなかった。そういう論文がある、というだけ。

張偉「《最後一課》漢訳溯源」(2004)*³⁸がある。

内容をまとめて問題点を指摘する。

1 ドーデ最初の漢訳を匪石「(教育小説)最後一課」(『湖南教育雑誌』2年1期1913.1.31)と誤る。韓一宇が2002年に誤りだと指摘していることを、なぜ張偉は知らないのか。

2 胡適「最後一課」にもとづいて匪石が書

き直したことに気がついていない。文章を比較対照しなかったらしい。

3 最初の全訳は、江白痕「(愛国小説) 小子志之」(『中華小説界』2巻5期1915.5.1)であると誤る。この段階で、しいていうなら(黄) 静英女士訳「(普法戦争軼事) 最後之授課」だ。しかし、全訳といっても問題を多く抱えている(別稿参照)。別に発表されている漢訳が最初であることに気づいていないのは、しかたがない。

4 胡適の翻訳は、削除がきわめて多い。かつて人から「でたらめな翻訳(胡訳)」と批判されたことがある。ただし、よく読まれた。

否定的なまとめになってしまった。もうしわけない。

有益な部分がないわけではない。148頁で「のち『洪水』雑誌にフランス語原作を引用し胡適のこの翻訳に対して批判を大いにくわえた人がかつていた(後來曾有人在《洪水》雑誌上引法文原作对胡適的這篇翻譯大加指責)」と紹介するのは親切だ。詳細ではないが、調査する手がかりになった。

趙亜宏「從胡適的早期翻譯小説看其文学翻譯觀 以《柏林之困》与《最後一課》為例」(2011)*³⁹がある。

論文の主題は、胡適の文学翻譯觀をさぐるものだ。どのように翻訳したか、翻訳の内容はどうなのか、という課題には興味を示さない。

趙亜宏は、ドーデ「最後の授業」の内容をざっと紹介する。その結果、フランス人が亡国の民になるのをよしとしない深い愛国の情感を反映している、と書く。最初に結論が、出ているのだ。そういう作品を漢訳した胡適はエライ。

胡適は、直訳と原著に忠実な方法を採用し、間接翻訳あるいは意識には賛成ではなかった。そう説明する。胡適の「最後一課」が、直訳ではないし、英語重訳だから間接翻訳に当たる、などという事実にはまるで無知だ。翻訳作品そのものを検討するつもりがない。見逃すのも当

然だろう。

たとえば、胡適は書き換えをした。趙亜宏が文中で引用している箇所であれば、「ザール川で氷滑りして」部分だ。胡適は「打木球」にわざと変えた。趙亜宏は、それが原文にはないことを認識しない(131頁)。どこが直訳だというのか。

ところが、フランツの名前をすべて削除し一人称に変えたことは、読者を主人公の思想境地に直接入り込みやすくするためだ、と弁護する。韓一宇論文と同じ説明があった。無断借用をしたか。

最初に胡適漢訳を称讃する方針を定めている。胡適が行なった大幅な削除については、指摘し説明することはない。ドーデ原作と漢訳を比較対照していないようだ。

結論が先にある。中国では、珍しいことではない。多くの論文がそのように書かれているように私は感じる。趙亜宏論文もそのなかのひとつだろう。

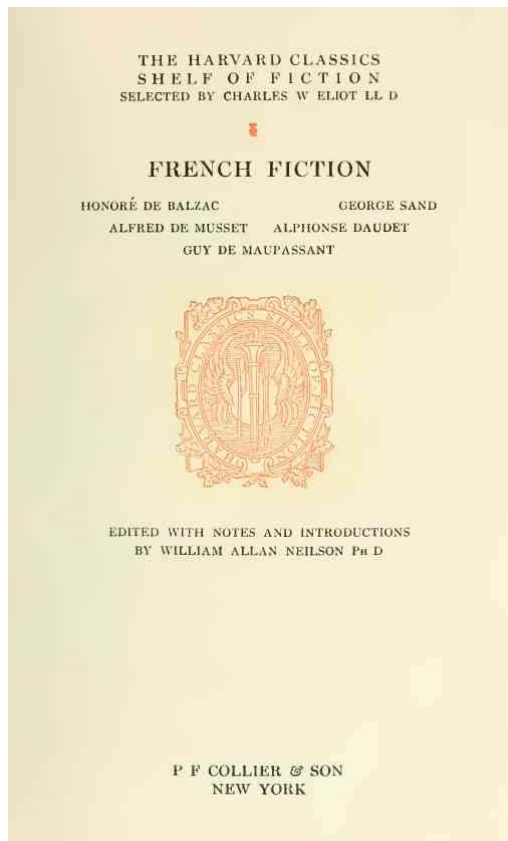
本稿を書いている今の時点で、次の論文が比較的新しい。

張恵「胡適翻譯小説底本及与其《紅樓夢》研究之關係考」(2013)*⁴⁰である。

該論文は、胡適の翻譯小説全体をあつかっている。その中の「最後一課」関係部分だけを本稿の対象とする。誤解のないようお願いしたい。

私が注目するのは、胡適が使用した底本から解明をしようとしている点だ。上に紹介してきたように、中国の研究者は底本に触れることが少ない。外国語の問題があろうかとも思う。しかし、底本問題は避けて通ることはできない。翻訳研究の手順からいえば、最初に取り組みべき課題のひとつといっていい。今まで放置していたほうが不思議だ。

私は、張恵論文を読んでただちに文章を書いた。2013年8月25日付で清末小説研究会ウェブサイトに掲載している。ここに再録する。



THE HARVARD CLASSICS SHELF OF FICTION

収録された英訳は、胡適訳「最後一課」の底本ではありません

昨日届いた雑誌に次の論文が掲載されていました。

張恵「胡適翻訳小説底本及与其《紅樓夢》研究之關係考」(『中国現代文学研究叢刊』2013年第8期(総第169期) 2013.8.15)

胡適「最後一課」についてのみ紹介します。

胡適はドーデ作品をフランス語原文から直接漢訳したわけではありません。英訳からの転訳です。

張恵の説明によると、*The Harvard Classics*が底本だそうです。

おかしなことに、底本についての詳細が明示されていません。

注を読むと次の論文が紹介されています。

段懷清「胡適文学改良主張中三個尚待澄清的問題」(『浙江大学学报(人文社会科学版)』2007年第3期(第37卷第3期) 2007.5.10)。ウェブで読むことができました。

おかしいですね。こちらにも詳細は書いてないのです。張恵たちは調べなかったのでしょうか。調べずに底本は特定できませんが。

該当するのは、以下の書籍です。

Alphonse Daudet. "The Last Class The Story of a Little Alsatian"

(Five short stories, by Alphonse Daudet. *THE HARVARD CLASSICS SHELF OF FICTION*, VOLUME XIII, PART 4. FRENCH FICTION. New York: P. F. Collier & Son, 1903 / 1917. 電字版)

結論を先にのべます。

残念ながら、上のハーヴァード古典書棚所収本は、胡適漢訳の底本ではありません。

胡適「最後一課」の底本は、次の英訳本です。

Alphonse Daudet著、Marian McIntyre英訳“THE LAST LESSON” *Monday Tales*. BOSTON: LITTLE, BROWN, AND COMPANY, 1900 (筆者注：これは間違い。本稿でレイノルズ英訳であることを指摘した)

詳しくは別に論文(筆者注：本稿のこと)を发表することにしています。

胡適の漢訳ロシア小説がもとづいた英訳本は、8月7日付で本研究会ウェブサイトで紹介しました。

こちらは、張恵も同じ結論に到達しているようです。

専門に論じて以上のようなものだ。

専論というわけではない。以下は、胡適の漢訳を紹介して、中国の標準的な文章だと思う。最近の文章を含めて3本を取り上げ、それでここは終わりにする。

ひとつは、馬蕭「胡適(1891-1962)」(1999)*41だ。

わずかに言及する「最後一課」部分を翻訳引用する。

1912年、彼(胡適)は白話文を用いてフランスの作家ドーデ(Alphonse Daudet)の短篇小説「最後の授業」(La Dernière Classe)を翻訳した。この翻訳は非常に成功し、のうち中学教材の模範文としてずっと選定された。これは胡適の翻訳能力と白話文の基礎を十分に示している。45-46頁

魯迅周作人兄弟からはじまる全16名の人物を概論する。翻訳という側面から取り上げる。だが、個々の作品を掘り下げて検討してはいない。紙幅からいって無理だったか。一般的な記述に終わるのもしかたないだろう。

もうひとつは、王友貴『翻訳西方与東方：中国六位翻訳家』(2004)*42だ。

最初に胡適のことを、訳作が最も少なく、影響がとても大きい翻訳家だと定義する。その短篇小説翻訳には、ひとつの特徴がある。すなわち、胡適はまず中国自身の新文学を建設するというところから着眼する。建設という立場から

出発して翻訳を考える(47頁)。

王友貴のこういう説明からは、その結論が透けて見えてしまう。胡適の翻訳を批判的に見る視点は最初から存在していない。礼讃ばかりだと予想がつく。結果はそのとおりだった。

漢訳作品そのものを具体的に評論することは、ない。底本についてもあやふやなままだ。

「彼が訳したフランス文学作品は、あるものは原文から訳し、あるものは英訳本から転訳した」(8頁)

「胡適はフランス語およびドイツ語の原著を読むことはできたが、しかし現在ある資料から見て、それぞれのフランス文学およびドイツ文学作品が原文によって翻訳されているかどうかは断定することができない」(51頁)

おかしい。上で書いているような胡適訳のドイツ語小説作品はないのだ。ハイネ小詩(1911)のことかもしれない。少なくとも『短篇小説』第一集に収録された小説には、ドイツ作品は存在しないことをいっておく。

「最後一課」についての記述を翻訳して引用する。

最初のドーデ「最後の授業(最後一課)」は、学校へいったことのある者であれば、この「愛国主義を奮い立たせる」名作を知らない人はいない。おそらくそれを暗唱することのできる中国人読者が、少なからずいる。知名度ばかりでなく、人々がそれを熟知している程度は、当時、「狂人日記」

あるいは「祝福」などの名作創作小説とほぼ優劣がつかなかっただろう。50頁

中国における最近の評価をくり返すだけだ。ドーデ作品を称讃するほど、中国人読者がドーデの策略に引っかかり誤読を続けてきた恥ずかしい事実を自讃することになる。それを自覚することがないから根が深いという。

50頁に疑問を感じる記述がある。「最後一課」は1912年に文言で翻訳され、のちに白話を用いて重訳された。何を根拠にしているのか不明だ。

胡適「最後一課」を特に取り上げているわけではない。作品名をあげるだけのものにすぎない。だいたいがこの水準だろう。次の文章も同様だ。

陳方競「胡適対短篇小説文体建設的貢献」(2013)*43がある。関連部分を翻訳して引用する。

「最後の授業(最後一課)」で亡国の恨み、「最後の授業(割地)」「ベルリン包囲(柏林之圍)」「二人の友(二漁夫)」で民族自強独立の愛国の気持ちなどのように、すべてが深刻な民族危機にある中国読者と作者に強烈な共鳴を引き起こしたのである。178頁

同一作品であるにもかかわらず「最後一課」と「割地」を分けるのはどういうわけか。まさか、それを知らないというわけではあるまい。亡国の恨みと愛国のふたつを備えているという意味かもしれない。好意的に解釈してはなした。結局のところ、旧題名と改題したものを説明なしに別置するのは、読者にとってはまぎらわしい。不親切である。

胡適の漢訳そのものを点検しているわけではない。すでに述べられてきている評価をくり返すだけ。

ドーデ「最後の授業」評価の中国における新しい展開

ドーデ「最後の授業」は、作品それ自体がもとから成立しえない。ドーデ作品の構造を実際の歴史事実にあてはめるのは無理なのだ。

もう少し具体的に説明しよう。

ドーデが作品で設定した基本構造はこうだ。

フランス・アルザス地方に、フランス語を母語とするフランツらアルザス人がいる。彼らにその母語を教えるために、本国フランスから来ている教師がアメル先生だ。

日韓併合、台湾割譲を例にとろう。ドーデ「最後の授業」を当てはめるとどうなるか。

朝鮮人の母語は、日本語である。台湾人の母語は、日本語でなければならない。そう設定すれば、ドーデ作品と同じになる。

ここを見ただけで、あきらかにおかしいとわかる。しかも、母語を教える先生は、日本人であり日本からやってきてこそ「最後の授業」を適用できる。常識から考えて、その基本からして成立しない。ここにどういう妥当性が存在するのだろうか。ありえない。

ドーデの「最後の授業」は、作品として基本的な欠陥を抱えている。それを歴史事実に応用できるはずもない。当たり前のことだ。

そこで研究者は、ドーデ流「母語が奪われる+祖国愛」の方向で利用できないかと模索する。その時点ですでにドーデ「最後の授業」とは、無関係になっている。研究者自身が気づいているのかどうかは、わからない。気づいていなければ、無知である。わかっていて筆を進めるのは、論文を書くためだけの確信犯だ。別の意図を持つのである。どのみち、ドーデと作品名を出すのは、いわば枕詞程度の働きがあるだけ。実質的な意味は、どこにもありはしない。「愛国主義」を象徴する、という中国における研究評論も、ドーデ流を採用している。

ならば、モンゴル、ウイグル、チベットなどにも適用できるはずだ。そういう論文は中国で

公表されているのだろうか。あるとすれば、読んでみたい。

ウェブで検索すると、呉澧「都德的《最後一課》真相（原題：都德牛皮課，童智馬脚文）」が出てくる。

真相を知らない中国の読者にとっては、「真相」という単語を表題に使うの方が理解しやすい。原題に使われている「吹牛皮」は、ほらを吹くという意味である。私が見たのは、2010年1月31日付『中国政治発展』電字版だ。別の表示では「《最後一課》：都德的愛国牛皮課」が、2010年2月2日付『南方周末網』電字版などにも掲載されている。

呉論文の内容は、今までのドーデ評価を一変させる。アルザス人はドイツ系アルザス方言をしゃべる。フランス語が母語ではない。本稿で紹介した論旨と同じだ。中国でもそこに気づく人が出てきた。

名前は出さないが郭延礼の文章をつかまえる。「愛国主義教育をおし進める最もすばらしい教材」とは、中国人をもてあそぶ大ボラである、とまで呉澧は罵る。最後は、ドーデの作品そのものが、中国中央テレビ局の節回し（央視腔）、新華社の紋切り型（新花体）、『人民日報』の教条主義（《人民日報》党八股）だとこき下ろす。というわけで、題名の「ドーデの愛国ほら吹き授業」となる。言い得て妙だ。

呉澧（筆名李霧）は『南方周末』に専門欄を持つ。「ドーデのほら吹き授業、童子の正体ばれ作品（都德牛皮課，童智馬脚文）」は、その専門欄に発表された。題名を変化させて複数のウェブサイトに掲載されているのは、読者の興味を喚起し話題をよんだということだろう。たとえば、朱蓬蓬「文章做到這箇程度才是學問」（ウェブサイト「華網文盟」2010.2.3）は、賛意を示した上でさらに呉澧の原文を再録している。

中国のウェブサイトで読むことのできる「ほら吹き授業」批判である。内容は正当だといえる。しかし、その題名のつけかた、揶揄する文

体があからさまで露骨だ。はたして、中国の学界で受け入れられるかどうかはわからない。その後、どのように展開しているのか、それとも無視されたのか。知りたいところだ（後述する闕文文の著作2013は、問題の存在そのものを知らない）。

1950年代、熱狂的に実践されていたあの「胡適思想批判」が、「文化大革命」後にひっくり返った。胡適評価が、黒から白にあっさり反転したのを私は見ている。ドーデ「最後の授業」評価も逆の方向で、同じことになる可能性があるかもしれない。（胡適の項終了。つづく） 罇

【注】

- 36) 沈思「都德小説的藝術魅力（代序）」（法）都德著、徐慶安等訳『最後一課』北京・華文出版社1998.2第二版 金絲帶叢書
- 37) 蘇華「胡適与都德的《最後一課》」『文藝理論与批評』1998年第2期1998.3.24
- 38) 張偉「《最後一課》漢訳溯源」『塵封的珍書異刊』天津・百花文藝出版社2004.1/2004.7第二次印刷。次は同文。張偉「都德《最後一課》漢訳瑣談」『出版史料』2010年第2期（新総第34期）2010.6.25
- 39) 趙垂宏「從胡適的早期翻譯小説看其文學翻譯觀以《柏林之罇》与《最後一課》為例」『名作欣賞』2011年第29期2011.10.1
- 40) 張惠「胡適翻譯小説底本及与其《紅樓夢》研究之關係考」『中国現代文學研究叢刊』2013年第8期（總第169期）2013.8.15
- 41) 馬蕭「胡適（1891-1962）」郭著章など編著『翻譯名家研究』漢口・湖北教育出版社1999.7
- 42) 王友貴『翻譯西方与東方：中国六位翻譯家』成都・四川出版集團、四川人民出版社2004.6
- 43) 陳方競「胡適對短篇小説文体建設的貢獻」錢理群主編『中国近代文學編年史：以文學廣告為中心（1915-1927）』北京大學出版社2013.5

周作人漢訳ヨーカイ・モール3完

『匈奴奇士録』の英訳底本について

樽本照雄

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998)*16から1カ所を原文のままを引用する。翻訳するまでもない。

「歴史小説《匈奴奇士録》(Egy az Isten), 全書訳稿6万余字, 此書1908年8^マ月由商務印書館出版」(462頁/371頁)

「6万余字」は、周作人の証言をそのまま引き写している。ここは原作を示してよしい。ただし、刊年を「1908年8^マ月」とするのは間違いだろう。旧暦「戊申九月」だから月数がずれる。そこ止まりだ。英訳に言及するわけではない。

謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-1949)』(2004)*17がある。

ヨーカイ・モールの経歴を簡単に紹介したあとだ。『匈奴奇士録』については、上海商務印書館が1908年に出版し、1933年9月に再版したと書く(521頁)。それで正しい。しかし、1915年に「説部叢書」に収録されたとか、1933年9月の再版は「世界文学名著」に、同年12月には「万有文庫」に収録されたと追加説明することもできたのではないか。

「序」(実際は「小引」)から引用している。

その「序」は、周作人の序跋文を集めたのちの別本によっていると説明がある。ということは、謝天振らは、該書の実物を見て文章を書いているわけではないとわかる。周作人が使用した英訳底本についての言及がないのもしかたがない。

もうすこし紙幅をさいた記述がないものかと探す。

劉全福『翻訳家周作人論』(2007)*18がある。『匈奴奇士録』関係で4カ所を紹介する。私の注をつける。

1 80頁の注4。本書の原題は『神是一個』(Egy ^マas Isten)である。翻訳名は『匈奴奇士録』と改め、1908年9月に商務印書館が出版した。

筆者注：1908年は新暦、9月は旧暦の新暦旧暦混用。

2 82頁。『匈奴奇士録』はペイン氏(R. N. Bain)が翻訳した。

筆者注：『夜読抄』に基づく。

3 205頁。1908年6月 ハンガリーのヨーカイ・モール著『神是一個』(出版社不詳)を訳す。

筆者注：「出版社不詳」とするのは張菊香『周作人年譜』天津・南開大学出版社1985.9、50頁からの引用。ここも新暦旧暦混用。

4 同上 1908年9月 『匈奴奇士録』が商務印書館から出版される。署名は周作人。

筆者注：単行本の署名は周遠だ。周作人だと誤るのも同『周作人年譜』51頁からの引用。

以上を見れば、翻訳家周作人を論じて『匈奴奇士録』については、それくらいのものだ。先行する『周作人年譜』を写しているにすぎない。周作人の回想をうち破って劉全福が新しい説明を提出できない理由である。

結局のところ、周作人漢訳『匈奴奇士録』の英訳底本について詳細は不明だということになる。

もう少し詳しい文章が、日本で刊行されている。

劉岸偉『周作人伝 ある知日派文人の精神

史』(2011)*¹⁹である。本稿に関係する部分を主として見る。

劉岸偉の研究方法を理解するために、漢訳アリ・ババから紹介する。

周作人の漢訳アリ・ババを解明するために、私は手間と暇をかけざるを得なかった。『アラビアン・ナイト』は莫大な英訳本を拡大生産していたからだ。

周作人は、英語の「アリ・ババと40人の盗賊」を漢訳した。「侠女奴」と題して雑誌に発表したのがそれだ。彼は回想する。特徴のある挿し絵について描写をしながら、それがニューズズ(GEORGE NEWNES)社版であると断言した。のちの研究者は、そのことばのままをくり返すのみ。確認した人は、2002年当時いなかった。

私は、ニューズズ社の原本を求めてロンドンの英国図書館を訪問したことがある。閲覧室で実物を見れば、周作人が説明するような挿し絵は、ない。文章も違う。おかしなことがあるものと思った*²⁰。

もしかすると、同じニューズズ社版とはいっても別版があるのではないか。実物数冊を購入したが、いずれも同一版本であった。周作人の記憶違いだと結論せざるをえない。

いくつかの版本を収集しながら、ようやくラウトレッジ社のフォースター版であることを突きとめたのだ。これこそが、周作人が説明した挿し絵とも一致する*²¹。

現在では、周作人「侠女奴」のよった英訳について、樽目録には以下のように説明している。

ROUTLEDGE社のEDWARD FORSTER, M. A. 版“THE ARABIAN NIGHTS.”より“THE HISTORY OF ALI BABA, AND OF THE FORTY ROBBERS, KILLED BY ONE SLAVE.”を翻訳。周作人自身はGEORGE NEWNES社版と書いているが、記憶違い

漢訳アリ・ババ、すなわち「侠女奴」の底本

について少し詳しく説明した。劉岸偉が、「侠女奴」に言及して私の論文を引用しているからだ。しかも、すでに問題は解決しているにもかかわらず、彼は奇妙な記述をする。

劉岸偉は、こう書く。

「周作人の『匈奴奇士録』はむろん英訳からの重訳だが、その英訳版本を突き止めるのは難しい(52頁)。「翻訳の底本について、もっとも有力な手がかりとなるのは、周作人が言及した出版元「ロンドン・ニューズズ社」である(同上)。

劉岸偉は、さらに、英訳『アラビアン・ナイト』児童版を独自に数種類掲げてみせる。詳しく探索したとわかる。

そうして注133(429頁)において、つぎのようにのべる。

「なお、樽本照雄氏は「侠女奴」翻訳の底本をフォースター版(Rev. Edward Forster, 1802)ではないかと推定しているが、確証はないという。(「周作人漢訳アリ・ババ侠女奴物語」1)」

樽本論文の掲載誌『清末小説』、号数、刊年も明示しない。論文名を誤記して正確さに欠ける。なによりも、底本については別に論文を発表してすでに結論を提出している。ラウトレッジ社フォースター版と指摘しているではないか。それを知らない。

劉岸偉は、この箇所について調査が不足している。そういわなければならないのは、残念なことだ。

劉岸偉の調査には、ちぐはぐなところがある。そういう彼は、周作人の『匈奴奇士録』をどのように説明しているのか。興味深い。

見れば、素っ気ないくらいに短い。引用する(ルビ省略)。

ロバート・ニスベト・ベイン(Robert Nisbet Bain, 1854-1909)は多くの言語に精通している歴史学者・翻訳家であり、ヨ

ウカイ・モルの英訳者の一人でもあった。周作人が最初に手がけた『匈奴奇士録』(Egy ^{ママ} sz Isten) もこのペイン氏の英訳による重訳である。97頁

劉岸偉は、周作人のことばを全面的に受け入れている。それにしては、周作人が掲げた英訳題名について説明しない。その必要を認めなかったということだろうか。詳細は不明。

「侠女奴」の英訳本を追求した時とは、様子が異なる。「侠女奴」のばあいは、各種英訳を調査して複数の版本を列挙していた。だが、ヨーカイ・モールについては、あまり興味がわかなかったらしい。ペイン英訳というだけ。底本がなになのかを書いていない。探求しなかったのだ。

それとも、ここに問題はなにもないという判断なのだろうか。私は批判しているのではない。偶然そういうことになったのだろう。そう思うだけだ。

最近の文章に、関連するものを見つけた。

鄒瑞珩「周作人《紅星佚史》、《匈奴奇士録》：翻訳史上の独特意義」(2013)*22だ。

表題に『匈奴奇士録』をあげている。詳しい説明があると期待してもおかしくはない。

鄒瑞珩は、周作人『知堂回想録』によりながら説明する。すなわち、以下のとおり。

『匈奴奇士録』とはヨーカイ・モールが1877年に書いた長篇小説『神は唯一だ(神是一個)』であり、英訳者はペイン(Robert Nisbet Bain)だ。

《匈奴奇士録》即育珂摩耳1877年所著の長篇小説《神是一個》，英訳者為倍因(Robert Nisbet Bain) 305頁

周作人が行なった説明を複写してすませている。簡潔すぎて、期待はずれだった。

ヨーカイ・モールの原作を「1877年」とする

のは、周作人「匈奴奇士録・小引」によるか。あるいは、先行する次の文章の影響だとも見える。無断借用といえいいすぎか。

止庵『周作人伝』(2010再版)*23のことだ。原作とその英訳について次のように書く(注番号は省略)。

『匈奴奇士録』とはヨーカイ・モール(Jókai Mór)が1877年に書いた長篇小説『神は唯一だ(神是一個)』(Egy az Isten)であり、英訳者はペイン(Robert Nisbet Bain)だ。

《匈奴奇士録》即匈牙利作家育珂摩爾(Jókai Mór)一八七七年所著長篇小説《神是一個》(Egy az Isten), 英訳者為倍因(Robert Nisbet Bain) 31頁

止庵も周作人の回想をくり返しているだけ。

同じ止庵による別の文章を見よう。周作人訳、止庵編訂『周作人訳文全集』第11巻(世紀出版集団、上海人民出版社2012.3)の解説である*24。

「本巻説明」(I-頁)から『匈奴奇士録』部分を抜き出す。便宜のために数字をふる。

1 ハンガリーのヨーカイ・モール育珂摩耳(Jókai Mór, 普通は約カイ・莫爾と訳す)著『匈奴奇士録』(Egy az Isten, 1877年; 訳者はロバート・ニスベット・ペインRobert Nisbet Bainの英訳本から転訳した)

匈牙利育珂摩耳(Jókai Mór, 通訳約カイ・莫爾)著《匈奴奇士録》(Egy az Isten, 一八七七年; 訳者系从Robert Nisbet Bain英訳本転訳) I頁

2 『匈奴奇士録』は、1908年5月に訳し終え、同年9月に商務印書館から出版された。署名は「周連」だ。1932年9月、商務印書館は「世界文学名著」に入れて新しく出版し、署名は「周作人訳」に改めた。

《匈奴奇士録》於一九〇八年五月訳畢，同年九月由商務印書館出版，署“周連”。一九三二年九月商務印書館列入“世界文学名著”重新出版，改署“周作人訳”。I-II頁

3 今、『匈奴奇士録』は、商務印書館1932年9月版による……

現《匈奴奇士録》據商務印書館一九三二年九月版，…… II頁

以上のみ。詳細な説明であるとはいえない。周作人が過去において、どのように発言していたのか、その紹介がない。また、その文章は正しいのか、検証もしていない。

だいいち、ペインの英訳本から転訳したと書きながら、その英訳本が何で、いつ、どの出版社から刊行されたのかを明らかにしていない。

周作人が「黄薔薇」のなかで明記していた英訳題名の *Midst the Wild Carpathians*. は、どうなったのか。

研究上解明すべき項目を無視して何も書いていないではないか。

止庵が、ペインの英訳であると書いているところからわかる。どうやら彼は、『匈奴奇士録』の英訳底本について独自の調査はしなかったようだ。全集の解説としては、不十分であるといわざるをえない。ここは論じる箇所ではないのだ。ゆえに、基礎的事実についてのたしかかな説明が必要とされるところである。いかななものかと思う。

また、小さいことを指摘しておく。止庵の文中に見える「一九〇八年五月」は、1908年が新暦で五月は旧暦だ。「同年九月」も同じこと。

いつもながらの新暦旧暦混用だといってしまう。それまで。ただし、現在もその用法によるならば、少しの説明があってもいいのではなからうか。

『匈奴奇士録』の英訳底本に関しては、私が見る限り、中国の研究論文、あるいは専門家は

すべて間違っている。ここには周作人本人を含めている。意外なことがあるものだ。

訳者である本人を入れるのは適切ではない。そう考える人がいるだろう。しかし、周作人は誤記をして英訳底本を行方不明にしまったのだ。後の研究者と同列にあつかうのが妥当である。

以上を見て、すこし驚く。「すこし」というのは、未知の分野がまだあるのだと実感するからだ。翻訳小説に関しては、中国の学界ではまだ十分な研究がなされていない部分が残っている。私の正直な感想だ。

周作人『匈奴奇士録』の英訳底本

疑問を解決するために追求しはじめた。あっけなく回答を得ることができたのは、自分でも意外だった。

本稿のはじめに書いておいた。

ペインは、たしかにヨーカイ・モールの作品をいくつか英訳している。しかし、『匈奴奇士録』の底本であるはずの英訳本にペインの名前が見つからない。

昔と今とでは、研究をとりまく状況が異なる。研究も例外ではない。調査の方法は変わらないが、その効率が比較できないくらいに向上している。

手がかりは、記号なしの「Jokai Mor」「Egy az Isten」「神一也」「神是一位」「神是一個」などだ。鍵語と言ってもよい。

ウェブで検索すれば、簡単に複数の候補作品があがってくる。

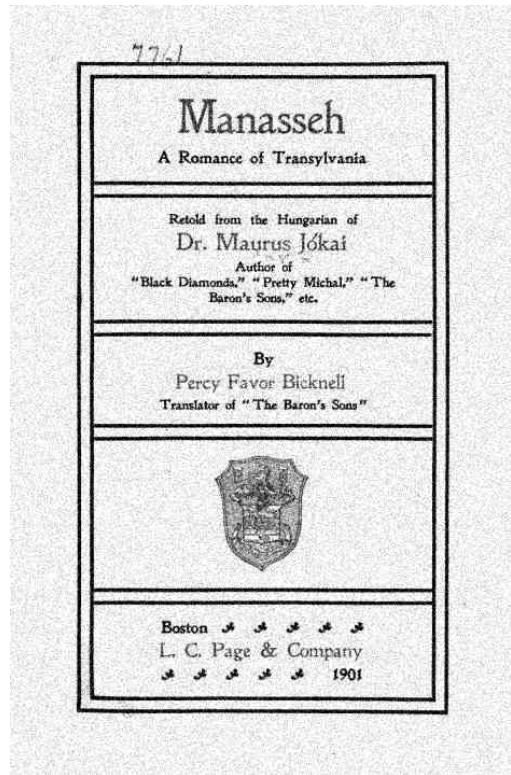
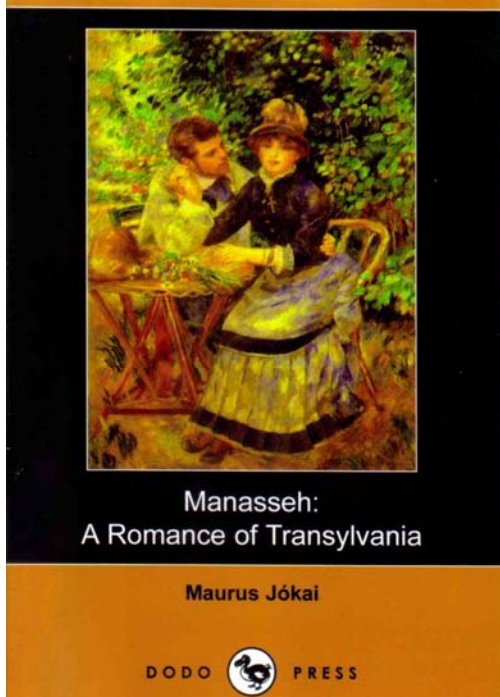
ヨーカイ・モールの小説 *Egy az Isten*. に「God is One, 1876」と注がつけてある。周作人が漢訳して示した「神は唯一だ」に結びつく。これに違いないだろう。英訳題名は、「Manasseh」である。その翻訳者は、Percy Favor Bicknellとわかる。

あとは、簡単だ。

英訳そのものが、テキストファイルで入手で

きる。ウェブから取り入れた。さらに、書店を通じてその復刻版も購入する。くわえて、影印本も入手できた*25。

こちらの影印本には、ヨーカイ・モールの肖像が掲げられている。これも引用しよう。



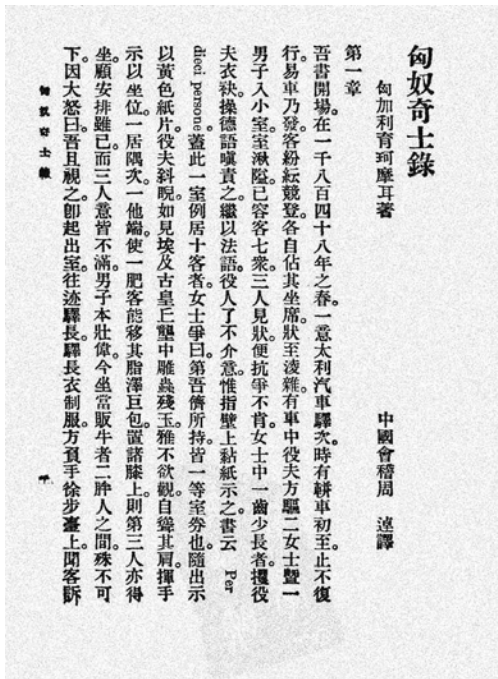
テキストファイル復刻版 / 影印本からヨーカイ・モール肖像、扉



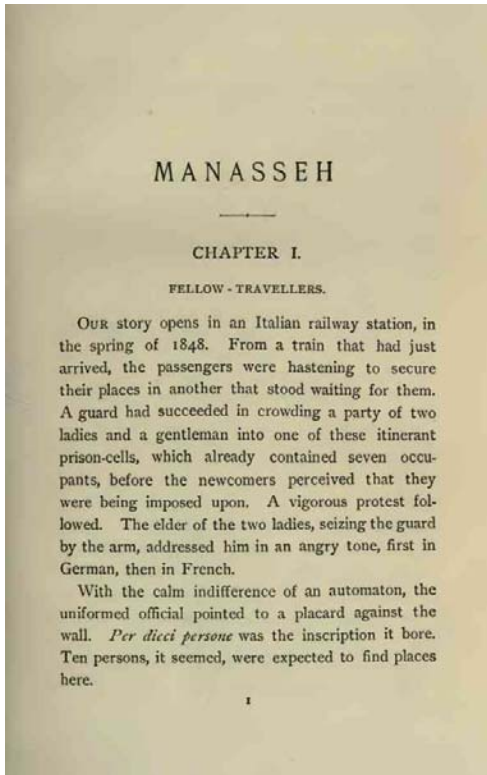
MÓR JÓKAI



ヨーカイ・モールの原作JÓKAI MÓR “EGY AZ ISTEN” , 1876-77 (“ ONE IS THE LORD ”) をビッケネルが英訳して以下のとお



周作人訳『匈奴奇士録』本文



ビックネル英訳『マナセ：トランシルヴァニア物語』本文

り。

MAURUS JÓKAI著、PERCY FAVOR BICKNELL英訳MANASSEH: A ROMANCE OF TRANSYLVANIA. Boston: L. C. Page & Company, 1901*26

日本語を表示しておく。パーシー・フェイバー・ビックネル英訳『マナセ：トランシルヴァニア物語』である。

マナセは、物語の主人公の名前だ(英訳: Manasseh Adorjan)。英語風に発音して、姓がアドリアン、名がマナセとなる。ハンガリー語原文ではAdorján Manasséとありマナシェに近い音に聞こえる。英訳本が底本だからマナセにしておく。

トランシルヴァニアは、以前ハンガリーの一部だった。今はルーマニア。

本文冒頭を示して確認する。

【ビックネル】Our story opens in an Italian railway station, in the spring of 1848. From a train that had just arrived, the passengers were hastening to secure their places in another that stood waiting for them.

私たちの物語は、1848年の春、イタリアのある鉄道駅ではじまる。到着したばかりの列車から、乗客たちは彼らを待ち受けていた別の車両に座席を確保しようと急いでいた。

【周作人】吾書開場。在一千八百四十八年之春。一意太利汽車駅次。時有駟車初至。止不復行。易車乃發。客紛紜競登。各自佔其坐席。

私の物語は、1848年の春、イタリアのある鉄道駅ではじまる。その列車は到着してそれ以上は動かないため、別の列車に換えて出発する。乗客は入り乱れ争って乗車すると各自がその座席を占めた。

1848年のイタリア、しかも鉄道が出てくると
いう不思議なはじまりかたである。

それは別にして、両者を比較対照すれば、周
作人漢訳がピックネル英訳を底本にしているこ
とは、疑いようがない。

本稿は、周作人訳『匈奴奇士録』の底本であ
る英訳を特定することが目的であるとくり返す。
結論は、以上のとおりだ。

以下は、余談。

今回の問題を解決するのは、それほど困難な
ことではなかった。ヨーカイ・モールとその原
作がすでに判明している。目標は最初から絞ら
れていた。困難か容易かは、比較の問題だとい
うことができる。

どこをどう探しているのかまるきりわからな
い『アラビアン・ナイト』(または『千夜一夜
物語』)とは、わけが違う。アリ・ババ英訳本
は、あれほど複雑で多様だった。あの数の多さ
は、探索に着手するまで想像できもしない。

あるいは、手探りで進めたシェイクスピア歴
史物語の探求を思い出しもする。

『匈奴奇士録』のばあいは、それらに較べれ
ば、という程度の差にすぎない。

周作人漢訳の底本となった英訳を誰も確認し
なかった。そのことのほうが、私から見れば不
思議に思える。

なぜ今まで誤ったことが専門家によって踏襲
されたのか。あるいは、なぜ問題が放置された
のか、という疑問があらたに出てくる。漢訳作
品名を掲げるだけで、それで十分だったのかと
いう問題にもつながる。

いや、疑問にもならないか。従来は、誰もそ
れが問題だとは認識しなかったらしい。ゆえに
調べる研究者がいなかった。

『匈奴奇士録』の英訳底本に限っていえば、
専門家は周作人の語句を写すだけで自分では追
求しない。あるいは、調査して先行文献を引用
するだけだった。そう言いかえてもかわらない。

【注】

- 16) 郭延礼『中国近代翻訳文学概論』漢口・湖北教育
出版社1998.3 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社
2005.7第二版第三次印刷
- 17) 謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-
1949)』上海外語教育出版社2004.9
- 18) 謝天振、查明建主編『中国現代翻訳文学史(1898-
1949)』上海外語教育出版社2004.9
- 19) 劉岸偉『周作人伝 ある知日派文人の精神史』
ミネルヴァ書房2011.10.30
- 20) 樽本「周作人漢訳アリ・ババの原本を求めて」
『中国近現代文化研究』第5号 2002.12.25、1-9頁。
要約：周作人『侠女奴』の原作は、『アラビアン・
ナイト』のなかの「アリ・ババと40人の盗賊」であ
る。周作人は、当時を回想した文章のなかで、原本
がニュウズ(GEORGE NEWNES)社版であるこ
とをくりかえし記述している。多くの研究者も、彼
の記述のままを受け入れる。しかし、原物で確認さ
れたことはない。私は、ロンドンにおもむき英国図
書館に所蔵される該社の『アラビアン・ナイト』を
閲覧した。周作人の漢訳と英文原作を比較対照した
ところ、彼が拠った原文はニュウズ社版ではない
ことを発見したのである。タウンゼンド版、レイ
ン選集版などを見たが、これらでもない。かろうじて
サグデン版が、漢訳に一番近いこともわかった。し
かし、完全に一致するわけではない。周作人漢訳の
原本さがしは、振り出しにもどったことをいう。
- 21) 以下の論文を書いた。
樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」物語 1
英文原作探索篇」『清末小説』第26号 2003.12.1、
1-51頁。要約：周作人が漢訳した「アリ・ババと40
人の盗賊」は、その英文原作がロンドン・ニュウ
ズ社版であることは、よく知られている。周作人が、
数度にわたり回想して証言している。しかし、実際
にニュウズ社版を見れば、周作人の証言が間違っ
ていることがわかる。どうやら勘違いしたらしい。
そこで、漢訳の底本を追求する作業が必要となった。
試行錯誤の結果、フォースター版、スコット版、ダ
ルケン版、ニモ社版、サグデン版、タウンゼンド版、
ニュウズ社版をしばらく探し、それらのなかから、
底本をさぐるまで到達した。ただし、決定的
な証拠を捜し当てることができない。
樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」物語 2 完
漢訳検討篇」『清末小説』第27号 2004.12.1、
34-70頁。要約：周作人漢訳「アリ・ババと40人の
盗賊」を英文原作と比較対照しながら、その翻訳の

質について検討する。これは、同時に底本探求のつづきでもある。具体的には、フォースター版、スコット版、ダルケン版、ニモ社版、サグデン版、タウンゼント版、ニュウズ社版を手元におき、それらの本文と漢訳をつきあわせ、底本を特定しようという試みである。こまかく検討したが、結局のところフォースター系ということが判明しただけで、特定するにはいたらなかった。ただし、周作人による本文改変について大きな発見をすることができた。改変箇所は、本人自身が認めていることもあり、比較的容易に判別することができる。そこで、周作人によってなされた改変は、作品自体にどのような意味をもっているかを指摘する。すなわち、女奴隷とアリ・ババの息子が結婚する原作を、結婚しないことに改変した。そこには、兄魯迅が「斯巴達之魂」で創造したスパルタの女性英雄セレナの影響が見える。セレナが自殺するのと同じく、「アリ・ババ物語」の女奴隷は幸福な結末をむかえてはならない。それこそが英雄だと考えた。そこで、行方不明と書き換えた。こうして、周作人は、「アラビアン・ナイト」の世界を破壊する結果となったのである。問題の根が深いのは、自分のしたことを彼は生涯理解しなかったところにある。

樽本「周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」の英文原本」『清末小説』第30号 2007.12.1、70-87頁。要約：周作人漢訳アリ・ババ「侠女奴」の英文原本がラウトレッジ社本の1種類であることをつきとめた。疑問として残してあった底本との異動部分を検証する。

- 22) 鄒瑞珩「周作人《紅星佚史》、《匈奴奇士録》：翻訳史上的独特意義」袁進主編『中国近代文学編年史 以文学廣告為中心(1872-1914)』北京大学出版社2013.5
- 23) 済南・山東画報出版社2009.1初版未見 / 2010.1第二版、2010.4第三次印刷
- 24) ウェブでも読むことができる。止庵「『周作人訳文全集』第九到十一巻説明」上海人民出版社、世紀文景2012.3.1 電子版
- 25) 復刻版と影印本の本文を比較対照する。影印本では、訳者前言の x 頁と第1章の1頁が欠落しているのを見つけた。油断がならない。
- 26) 参考までに。題名と本文は同文だが副題の異なる後の版本がある。MAURUS JÓKAI 著、英訳者不記 *MANASSEH: A Story of the Stirring Days of '48*. NEW YORK: THE WALTER SCOTT PUBLISHING CO., LD. (刊年不記[1908]) 訳者序なし。

清末民初俄国小说译介路径综考(上)*

付 建 舟

内容提要：目前学界关于清末民初俄国小说汉译的研究并不充分，对其译介路径的全面考证更加缺乏。笔者以所见的原刊原版为基础，从三种译介路径与不明路径进行综合考察，发现这一时期俄国小说汉译本中短篇小说近20部，短篇小说与故事约140多篇（则），从而揭示其总体状况，揭开真实面目。同时，简要评述其译介特点及其对中国文学发展的历史作用。

关键词：清末民初 俄国小说 译介路径

也许由于政治意识形态与知识分子意识形态及其五四文学本位观的影响，学界对清末民初汉译俄国小说一直存在一种偏见，由此所表现出来的漠视与对五四以后的汉译苏俄小说的高度热情形成鲜明的对比。学界对前者的研究不仅考证很不充分，而且评价也明显偏低。一些涉及这一论题的论文和论著或论著中的相关章节，多半相互转用已有的资料，新发掘的材料比较欠缺。不少论述大多建立在工具书“篇目”索引的基础上，未能全面查阅原刊原文，有时以讹传讹。因此，该论题有继续研究的必要。笔者不揣浅陋，根据自己多年的累积，以经眼译作为主，辅以现有相关研究成果与工具书，试图揭示清末民初俄国小说汉译的面貌，以抛砖引玉，就教于方家。

一、日译本译介路径的俄国小说考述

在研究的过程中,我们发现,清末民初一些俄国小说汉译本是经过日译本转译的。日本自明治维新以来,脱亚入欧,取得了辉煌的成就。甲午战败,中国取道日本学习西方,成为大势所趋。日本是我国西学东渐的一道重要桥梁,通过日译本转译,成为俄国小说汉译的一条重要路径。

有些译作的序跋、小引、原著者或译者自注、版权页等文本之外的副文本,为我们辨别汉译本所据底本提供了一定的依据。例如《俄国情史》、《枕戈记》、《忧患余生》等作品,我们根据副文本可知,这三部译作都是根据日文转译的。其篇目如下:

1903《俄国情史》(今译为《上尉的女儿》),普希馨(普希金)原著,戢翼翠译,上海大宣书局光绪二十九年(1903)六月十五日出版。

1905《枕戈记》,托尔斯泰原著,未署汉译者,《教育世界》第100、102、111号(光绪三十一年四月下旬、五月下旬、十月上旬)。

1907《忧患余生》(今译为《该隐与阿尔乔姆》),戈厉机(高尔基)原著,吴棹译,《东方杂志》第4卷第1-4期(光绪三十三年正月二十五日至四月二十五日)。

《俄国情史》的版权页明确地署曰“译述者 日本高须治助”,“重述者 房州戢翼翠”。正文前还署“《俄国情史:斯密士玛利传》(一名《花心蝶梦录》)”。译者高须治助又为高须治辅笔名墨浦、五湖散人,精通俄语。1883年,他将普希金的《上尉的女儿》译成日文题名《俄国奇闻 花心蝶思录》。高须治助的日译本是根据俄文原著翻译的。《俄国情史》以此书为蓝本,但忠实于日译本,高须治助的白话日译本约八万七千字,而戢翼翠的文言汉译本仅二万七千字,不足白话译本的三分之一*1。《枕戈记》卷首的一段话提供了诸多有益信息,这段话说:“《枕戈记》为俄国现代文豪脱尔斯泰所著。假一军人口吻,述俄营情状也。日本二叶亭译之。江苏师范学堂取作习和文课本。本社据其译稿润色之” *2。又据日本樽本照雄编《清末民初小说目录》(第6

版)(日本:清末小说研究会2014年)(以下简称“樽目录”),《枕戈记》又译为《林木伐探》,原著初版于1855年,二叶亭(四迷)译成日文,1904年7月由日本金港堂出版,题“军事小说”。二者是吻合的。《忧患余生》原刊署“日本长谷川二叶亭译”,“钱唐吴棹重演”,“原名《犹太人之浮生》”,题“种族小说”。又据“樽目录”,二叶亭日译为《犹太人の浮世》,刊载《太阳》杂志第11卷第2、4号(1905年2月1日-3月1日)。二者也是吻合的。

有些译作可以通过直接或间接的研究,确认或猜测其汉译时所据底本。我们重点考察以下作品(笔者未见者随后注明):

1907《银钮碑》(即《当代英雄》第一部分《贝拉》),俄国莱门忒甫(莱蒙托夫)原著,吴棹译述,商务印书馆光绪三十三年六月初版,“袖珍小说”丛书之一。

1907《黑衣教士》(今译为《黑修士》),俄国溪崖霍夫(契诃夫)原著,吴棹译。《袖珍小说》丛书之一,商务印书馆光绪三十三年初版,中华民国三年(1914)三版。

1908《鹰歌》,俄国郭尔奇(高尔基)原著,天蛻译,《粤西》(东京)第4号(1908年5月29日)。(未见)

1909《俄帝彼得》,俄国蒲轩根(普希金)原著,冷(陈景韩)译,《小说时报》第1年第1期(宣统元年九月朔日即1909年10月14日)。

1909《生计》,俄国屈华夫(契诃夫)原著,冷(陈景韩)译,《小说时报》第1年第2期(宣统元年十月朔日即1909年11月13日)。

1909《写真贴》,俄国祁赫夫(契诃夫)原著,笑(包天笑)译,《小说时报》第1年第2期(宣统元年十月朔日即1909年11月13日)。

据“樽目录”可知,《银钮碑》LERMONTOV 著《现代の英雄》(《ペーラ》部分),1840出版,有日译本,嵯峨家主人所译,易原名《当代の人物》为《当代の露西亚人》,刊载《太阳》杂志第10卷第5号(1904年4月1日)。《黑衣教士》也有日译本,为薄田斩云所译,译名为《黑衣僧》,刊载

《太阳》杂志第10卷第13-14号(1904年10月1日-11月1日)。1904年,《大陆报》第2年第12号(光绪三十年十二月二十日)刊登了《东京留学生天君蛻与本馆记者书》一文,由此可知天蛻为留日学生,则《鹰歌》可能以日译本为底本。据李艳丽考证,《鹰歌》由日本上田敏1902年日译为《鹰之歌》,天蛻的底本很可能就是《鹰之歌》。另外,李艳丽还考证说,《俄帝彼得》日译为《彼得大帝黑奴》,日译者不详;《写真贴》由日本濂沼夏叶1903年日译为《相册》,刊载于明治36年10月的《新小说》杂志上*3。她没有明说这几篇汉译作品以相应的日译本为底本,但有这样的暗示,我们权且遵循其暗示。《生计》为陈景韩所译,陈曾留日,权且认为他以日译本为底本。

以日译本为底本的译者,一般有留日经历,或偶尔客串,翻译小说,如戢翼翬;或一个时段集中从事小说翻译,如吴棹、陈景韩。另外一些译者出于对文学的浓厚兴趣与爱好,自学日语,借助工具书翻译,如包天笑。他们三人是以日译本为底本译介俄国小说的杰出代表,具有典型性。上述日译本的译介主体包括高须治助、二叶亭(四迷)、升曙梦、嵯峨家主人、薄田斩云、上田敏、濂沼夏叶,当然还有不少其他日本翻译家的俄国小说日译本没有进入我国译者的视野。

二、英译本译介路径的俄国小说考述

在研究过程中,我们还发现,许多俄国小说汉译本是经过英译本转译的。最初的译者是在华传教士,如美国传教士丁魁良;有的传教士还有华人合译者,如美国传教士林乐知及其合译者任廷旭、德国传教士叶道胜及其合译者麦梅生等。这些传教士的英文水平很高,他们往往根据英译本把俄国小说(包括寓言、故事)译成汉语,在中国出版传播。他们试图借助于所译的寓言、故事表达一些哲理,为他们在华传播宗教服务。当然,这些译作对改良中国社会也发挥了积极作用。他们的译作如下:

1872《俄人寓言》,未署原著者,美国丁魁良译,《中西闻见录》第1号(1872年8月即同治

十一年七月)。

1899《俄国政俗通考》,据印度广学会原本,美国林乐知与任廷旭合译,上海广学会光绪三十二年(1906)版。原连载《万国公报》第131-136册(光绪二十五年十一月即1899年12月至光绪二十六年四月即1900年5月)。(未见)

1907《托氏宗教小说》,俄国托尔斯泰原著,德国叶道胜译,东官麦梅生述,香港礼贤会出版,光绪三十三年丁未,西历一千九百零七年。

《俄人寓言》讲的是关于道义的故事,没有足够的依据证明其底本为英译本,但可能性很大。《俄国政俗通考》据戈宝权所言“从英文译出”*4,其中包括克雷洛夫的三则寓言。在《万国公报》上首载时,还有《俄国政俗通考(并序)》,连载的最后一期是《俄国政俗通考弁言》。《托氏宗教小说》也据戈宝权所言“根据英国尼斯比特·贝恩翻译的《托尔泰小说集》转译”*5。部分译作曾在上海《万国公报》和《中西教会报》上发表过。《托氏宗教小说》凡十二篇,包括《主奴论》、《论人需土几何》、《小鬼如何领功》、《爱在上帝亦在》、《以善胜恶论》、《火忽火胜论》、《二老者论》、《人所凭生论》、《论上帝鉴观不爽》、《论蛋大之麦》、《三耆老论》、《善担保论》。叶道胜说,他汉译《托氏宗教小说》之宗旨在于“己立立人,己达达人”,“欲华人知俄国亦有至善之著作家”*6。王炳堃在序言中还说:“泰西小说或喻言,或寓意,可以蒙开学,淪民智,故西学之士译泰西小说,不啻汗牛充栋”*7。他强调《托氏宗教小说》开启民智的启蒙作用。

除了几个传教士外,根据英译本汉译俄国小说的基本上是中国译者,如周作人、莫等闲斋主人、朱世溱、陈赓等。他们的译作如下:

1905《一文钱》,俄国斯谛普克原著,三叶(周作人)译,《民报》1905年第21号。

1908《奈何天》,俄亚历山大杜庐原著,莫等闲斋主人(陈尺山)译。上海改良小说社光绪三十四年(1908)正月中旬出版,新世界小说社总发行。题“写情小说”。

1908《庄中》(即《威施》),署名“俄国安敦契诃夫著”、“独应译”,《河南》杂志第8期(光绪三十四年十一月十二日),题“短篇小说”。

1909《域外小说集》(周作人翻译的俄国小说部分),周氏兄弟译,1909年先后分两册在日本东京出版,1921年两册合订并增补21篇由上海群益书局。(前者未见)

1914《骠骑父子》(今译为《两个骠骑兵》),俄国托尔斯泰原著,朱东润译述,上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列第二集第八十一编,中华民国四年十月九日初版,题“义侠小说”。

1915《春潮》,俄国屠尔格涅甫(屠格涅夫)原著,陈赅节译,《青年杂志》第1卷第1-4号(1915年9月15日-12月15日)。

1916《克利米战血录》,俄国托尔斯泰原著,朱世溱(朱东润)译,上海·中华书局1917年5月初版,1930年11月再版。《小说汇刊》之一,题“军事小说”。

莫等闲斋主人,姓陈,原名韵琴,字尺山,号吴玉,长乐人,居福州。肄业于福建船政学堂,曾游学英伦,回国后居上海。除译作《奈何天》外,还著有传奇多种,包括《孟谐传奇》、《病玉缘传奇》等*8,《奈何天》的翻译可能以英译本为底本。周作人在南京水师学堂学习五年,主要成绩是英文和汉文。五年后,他取得官费留日资格,居日前后达八年之久。他翻译域外文学作品主要以英文本为底本,翻译俄国小说也是如此。刊登于《民报》上的《一文钱》和刊登于《河南》杂志上的《庄中》都收入《域外小说集》中。《一文钱》的“译者附记”声称根据“其友人英国伏尼契 Ethel L. Voynich 氏译存之本”重述,因而汉译本可能以英译本为底本。群益书局1929版的《域外小说集》包括5位俄国作家的小说与寓言作品18篇,其中斯谛普虐克的小说有《一文钱》一篇,迦尔洵的小说有《邂逅》与《四日》二篇,契诃夫的小说有《威施》与《塞外》二篇,安特来夫的小说有《谩》与《默》二篇,梭罗古

勃的小说有《未生者之爱》一篇,寓言有《屠儿》、《冰糖》、《糖块》、《金柱》、《误会之起原》、《蛙》、《石子之经历》、《未来》、《路与光》、《烛》十篇。除了《四日》、《谩》与《默》三篇为周树人所译外,其余均为周作人所译。止庵认为,周作人的译作“据英文翻译或转译”*9,其根据可能源自周作人的《学俄文》一文。周氏曾回忆说,自己学习俄文半途而废,之所以学俄文,是因为佩服“它的自由的革命精神及其文学”,这一点一直没有变,“这计划便是用了英文与德文间接的去寻求,日本語原来更为方便。但在那时候,俄文翻译人材在日本也很缺乏,经常只有长谷川二叶亭和升曙梦两个人,偶然有译品在报刊发表。升曙梦的还算老实,二叶亭因为自己是文人,译文的艺术更高,这就是说也更是日本化了,因此其诚实性更差,我们寻求材料的人看来,只能用作参考的资料,不好当作译述的依据了”*10。这是夫子自道,真实可信。由此推测,周作人的译本很可能是以英译本为底本,不排除参考日译本。这种翻译现象一直到二十世纪三十年代仍然存在。1939年3月,由上海启明书局初版的俄国屠格涅夫的长篇小说《父与子》也是这样翻译的。译者蓝文海在“小引”中明确地说:“本书是从汤姆斯·塞尔若(Thomas Seltzea)的英译本和参照米川正夫的日译本译出”*11。原因大概一样,可能英译本忠实于原著,日译本过于日本化,为了既最大限度地忠实于原著,又能很好地汉译,他们相继采用这一策略。

朱东润的两部译作是留学英国时所译。1913年,朱东润通过留英俭学会赴伦敦,迫于生计而译书。他曾说:“我的英文程度本来很有限,到得英国可能有一些长进。翻译的问题是可大可小。……在经过一两次失败以后,我的译稿居然也能寄到上海换取外汇”*12。除了翻译文学作品外,他还翻译了一本《英国报业述略》,该译作在当时上海的《申报》上连载。《骠骑父子》与《克利米战血录》就是他这一时期的译作,其底本可能为英译本。《春潮》由陈赅所译。陈赅早年留学日本,自学英语,是《青年杂志》(《新

青年》的前身)的英文编辑,曾任教安徽大学日语教授*13。《春潮》正是他作《青年杂志》英文编辑时所译,并连载于该杂志上,因此可以推测其底本为英译本。

在中国翻译史上创造了奇迹的林纾,本身不懂外文,却凭借深厚的古文功底与合作者共同翻译了一百多部域外小说,其译作成为“林译小说”品牌,在清末民初十分流行,经久不衰。其众多的合译者中没人懂俄文,其俄国小说汉译本一般根据英译本转译。马泰来认为,“林译各种托尔斯泰作品,当皆据英译本重译。唯所据英译本,无法考出”*14。今从其说。这些译作*15如下:

1914《罗刹因果录》,俄国托尔斯泰原著,林纾、陈家麟合译,上海商务印书馆出版发行。《东方杂志》第十一卷第一至六号连载(1914年7月至12月)。《说部丛书》四集系列二集第三十九编,封面题“笔记小说”,上海商务印书馆中华民国四年(1915)五月初版,同年十月再版。

1917《社会声影录》(收小说《尼里多福亲王重务农》与《刁冰伯爵》两篇),俄国托尔斯泰原著,林纾、陈家麟译述,上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列三集第二十二编,中华民国六年五月初版。

1917《路西恩》(Lucerne)(今译为《卢塞恩》),未署原著者,林纾、陈家麟译,《小说月报》第8卷第5号(民国六年五月)。(俄国托尔斯泰原著)

1917《人鬼关头》(今译为《伊凡·伊里奇之死》),托尔斯泰原著,林纾、陈家麟译,《小说月报》第8卷第7-10号(民国六年七月至十月)。

1918《恨缕情丝》(收小说《波子西佛杀妻》与《马莎自述生平》两篇),俄国托尔斯泰原著,闽县林纾、静海陈家麟译述,上海商务印书馆出版发行。《小说月报》第九卷第一号至十一号(1918年1月至11月)连载。《说部丛书》四集系列第三集第六十二编,中华民国八年(1919)四月初版,中华民国九年(1920)十月再版,中华民国十年(1921)十月三版。

1918《现身说法》(今译为《童年 少年 青

年》),俄国托尔斯泰原著,林纾、陈家麟译述,上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列第三集第五十三编,中华民国七年(1918)十一月初版,中华民国九年(1920)八月再版,中华民国十年(1921)九月三版。

由林纾与陈家麟合译的上海商务印书馆1921年出版的《俄宫秘史》比较特殊,不得不提。马泰来在《林纾翻译作品全目》中把《俄宫秘史》列入法国魁特名下*16,彭建华在其论著《现代中国的法国文学接受》中也是如此*17,可能因为《俄宫秘史》版权页署“原著者 法国魁特”的缘故。然而,他们均忽略了作品卷首“法国魁特转译德文”的字样,更忽略了卷首“小引”。出自法国魁特之手的“小引”说,此卷为斐多路纳之秘史,“记之者,丹考夫伯爵夫人也。……凡以下所叙述,均出诸丹考夫之口,语皆切实,……丹考夫草稿为德文,或意大利文,余则译以英文,言语皆肖,无复谬误”*18。由此可见,《俄宫秘史》由俄国丹考夫所撰,由魁特英译。林纾、陈家麟可能根据英译本汉译,这也为马泰来的“英译本”路径说提供佐证,尽管马泰来是就托尔斯泰的译作而言的,却可以扩展到林纾与陈家麟合译的其他俄国小说。

另外两部可能以英译本为底本的译作如下:

1915《雪花围》,俄国托尔斯泰原著,雪生译,上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列第二集第六十三编,中华民国四年(1915)十月一日初版。封面题“醒世小说”,短篇小说集。

1917《婀娜小史》(今译为《安娜·卡列尼娜》),俄国托尔斯泰著,陈家麟、陈大镫合译,上海:中华书局,《小说汇刊》之13至16。1917年8月初版,1920年4月再版。

《雪花围》的译者雪生,其生平不详,待考。该译作据说“据英译本转译”*19。《婀娜小史》的主要译者是陈家麟。他与林纾合译的数部托尔斯泰小说均以英译本为底本,此译作可能也

是如此。这两部译作均有待进一步考证。

《不测之威》有两种汉译本，其一如下：

1908《不测之威》(今译为《谢历勃里尼亚尼公爵》)，俄国托尔斯泰(即阿·托尔斯泰)原著，上海商务印书馆编译所编译，上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列第二集第九十五编，戊申年(1908)二月十八日初版，中华民国四年(1915)十月廿三日再版，题“历史小说”。

这部译作很有代表性，其版权页不署具体译者，而署“上海商务印书馆编译所编译”。因译者属于商务印书馆的职员，馆方提供了薪水，译作的版权属于馆方而不属于个人。那些署具体译者的译作属于馆方在一定时间内购买著作人的著作权，馆方只拥有暂时的版权。二者性质完全不同。该编译所的职员或曾自学外语(如英语、法国、日语等)，或曾留学海外，具有较高的外文水平，能够独自或合作翻译外文书籍。根据当时外语学习的风气，该译作的底本能可能是英译本或日译本，前者的可能性更大。《不测之威》的另一译本是周作人翻译的《劲草》，它几乎与《不测之威》同时译成，因重复而未被采用出版。1909年，周树人(即鲁迅)在为《劲草》所写的序言中，一方面强调了重译的合理性，“比附原著，绎辞细意，与《不测之威》绝异”，“因念欧人慎重译事，往往一书有重译至数本者，即以我国论，《鲁滨孙漂流记》，《迦因小传》，亦两本并行，不相妨害。爰加厘订，使益近于信达。托氏撰述之真，得以表著；而译者求诚之志，或亦稍遂矣*²⁰”。另一方面，澄清当时国人把阿·托尔斯泰(即亚历舍托·尔斯多)与列夫·托尔斯泰(勒夫·托尔斯多)混为一人的错误，指出二者为从兄弟关系。鉴于周作人的译作多以英译本为底本，权且认为《劲草》也如此。

以英译本为底本的译者一般具有良好的英文水平。有的具有新式学堂就学的经历，重视英语的学习，对文学很感兴趣，或偶尔为之，如朱世溱；或投入不少时间和精力，如莫等闲斋主人；或日后以文学为业，如周作人。有的英文水

平较高而汉文水平不足，常与他人合译，如陈家麟。有的供职于出版机构而不拥有著作权，如《不测之威》的汉译者。总之，情况各异，不一而足。 罍

【注】

* 本文为教育部人文社会科学研究青年基金项目“《说部丛书》研究”(09YJC751079)的部分成果。

- 1) 参见张铁夫：《普希金初临中土的向导——戢翼攀与普希金》，《湘潭大学社会科学学报》2000年5期。
- 2) 见《枕戈记》卷首，托尔斯泰原著，未署汉译者，《教育世界》1905年5月第100号。
- 3) 李艳丽：《晚清俄国小说译介路径及底本考——兼析“虚无党小说”》，《外国文学评论》2011年第1期，第212-213页。
- 4) 戈宝权：《托尔斯泰和中国》，《托尔斯泰研究论文集》，上海译文出版社1983年版，第17页。
- 5) 戈宝权：《托尔斯泰和中国》，《托尔斯泰研究论文集》，上海译文出版社1983年版，第20页。
- 6) 叶道胜：《托氏宗教小说序》，《托氏宗教小说》，俄国托尔斯泰原著，德国叶道胜译，东官麦梅生述，香港礼贤会1907年版，第1页。
- 7) 王炳堃：《托氏宗教小说·序》，《托氏宗教小说》，俄国托尔斯泰原著，德国叶道胜译，东官麦梅生述，香港礼贤会1907年版，第1页。
- 8) 参见官桂铨：《莫等闲斋主人考》，《文献》1983年第2期，第185页。
- 9) 止庵：《总序》，《域外小说集》，北京：新星出版社，2006年，第2页。
- 10) 《周作人回忆录》，长沙：湖南人民出版社，1980年，第202—203页。
- 11) 《父与子》，俄国屠格涅夫原著，蓝文海译，上海：启明书局，1939年，第1页。
- 12) 《朱东润传记作品全集》第4卷，上海：东方出版社，1999年，第75—76页。
- 13) 叶永胜：《陈独秀文学革命的践行者：陈霞及其文学翻译》，《安庆师范学院学报(社会科学版)》2010年第5期。
- 14) 马泰来：《林纾翻译作品全目》，钱钟书等著《林纾的翻译》，北京：商务印书馆1981年，第91页。
- 15) 本文的“清末民初”主要指“1894-1919”这一时段，林

纾与陈家麟1919以后合译的五部(篇)俄国小说备录于此,以供参阅。其篇目为:

1920《球房纪事》, Lev Necolaeovich Tolstoy(俄国托尔斯泰)原著,林纾、陈家麟同译,《小说月报》第11卷第3期(民国九年三月)。

1920《乐师雅路白忒遗事》,俄国托尔斯泰原著,林纾、陈家麟同译,《小说月报》第11卷第4期(民国九年四月)。

1920《高加索之囚》,俄国托尔斯泰原著,林纾、陈家麟同译,《小说月报》第11卷第5期(民国九年五月)。

1921《俄宫秘史》,林纾、陈家麟合译。闽县林纾、静海陈家麟译述,上海商务印书馆出版发行。《说部丛书》四集系列第四集第一编,中华民国十年五月初版。

1924《三种死法》, Tolstoy 原著,林纾、陈家麟同译,《小说世界》第5卷第1期(民国十三年一月)。

16) 马泰来:《林纾翻译作品全目》,钱钟书等著《林纾的翻译》,北京:商务印书馆1981年,第91页。

17) 彭建华:《现代中国的法国文学接受》,北京:中国书籍出版社,2008年,第48页。

18)《俄宫秘史》,林纾、陈家麟合译,上海商务印书馆出版1921年初版,第1-3页。

19) 见中国国家数字图书馆关于《雪花围》上海商务印书馆出版1915初版本的编目信息。

20)《鲁迅全集》第8卷,北京:人民出版社,2005年,第457页。

[作者简介] 付建舟,男,1969年生。浙江师范大学人文学院研究员。

商務版「説部叢書」研究の昔と今3(上)

改組の時期

樽本照雄

本稿は、同題2の続稿だ。副題を新しくした。前稿の公表から少し時間があいたので、内容に重複する箇所がある。ご了解いただきたい。

「説部叢書」といえば、商務印書館が刊行した外国小説翻訳叢書として有名である。

「説部」は、小説という意味だ。普通は主として、小説あるいは随筆などを指す。ところが、商務印書館の「説部叢書」は、基本的に翻訳小説であるところに特徴がある。

中国の知識人は、林訳小説によって西洋小説の存在を知り興味をもった。彼らの眼を海外に向けさせた。林纾が中心になって清末の社会に送り出した翻訳小説群についてよくいわれる。その多くは「説部叢書」に含まれる。果たした影響はとても大きい。

研究者が商務版「説部叢書」についてどれくらい理解しているか。その程度によって、以下の4層にわけられる。これが本稿における新しい工夫だ。各論文の到達点が一目見てわかるようにした。理解度による分類など、今までにはなかったと思う。

結論めいたことを先にいう。どうしたわけか、「説部叢書」については基礎知識が共有されているとはいいがたい。研究する人も多くはないのだ。社会に与えた影響の大きさを考えれば、

無視できるはずもないのだが、不思議なことだ
と思う。

理解度で分類

第1-4層にわけた。第1層の理解度は浅く、
順に深くなる。第4層にいたると「説部叢書」
の問題点はほとんど把握している。そういう分
類である。研究者の名前とその論文著作発表年
を示す。

具体的な内容は以下のとおり。

第1層 商務版「説部叢書」があること
を知っている。

例：謝菊曾1980、郭延礼1998

第2層 「説部叢書」初集から第4集ま
でが刊行されていることを知っている。

例：商務印書館図書目録1981、陸昕
2001、陸昕2005、黄暉2008、付建舟2012

第3層 元版と初集本に分かれているこ
とを知っている。

例：叢書目録1980、鄒振環2000、鄒振
環2000、劉徳隆2009、付建舟2009、付建
舟ら2010、付建舟2013、鄒瑞玥2013、祝
均宙2013

第4層 先元版、元版1型2型、初集本
の区別があることを知っている。作品の
差し替えを行なった改組、表紙の違い
(タンポボ文様とリボン文様)、初集改
称について知っている。そればかりか、
改組の時期がいつなのかを考察する。

例：中村忠行1981、神田2002、樽本
2011、樽本2012、樽本本稿

「例」にあげた研究者の論文を主に紹介しな
がら説明したい。最後に新しく公表された論文
を紹介する。

理解度による層分けをしたところで、その意
味を理解する人はほとんどいないと思う(私の
論文を読んでいる人は除く)。大部分の人は、

商務版「説部叢書」があることを知っているか
どうかもわからない。その存在を知っているだ
けならば、第1層に属している。版元である商
務印書館の関係者であっても例外ではない。

上の分類を見ればすぐわかるだろう。

中村論文は、1981年と早いにもかかわらず最
深層の第4層だ。中国人研究者の論文発表は、
中村論文に比較すれば時間的に見てはるかのち
のことだ。陸昕が2001年だから、遅れるといわ
ざるをえない。しかも、理解度は浅い。どうい
うことか。おいおい説明していく。

「説部叢書」について書かれた論文を読むと、
その接近のしかたがふたつに分かれることに気
づく。

ひとつ。清末民初の翻訳小説にしばって研究
する人だ。自然と商務印書館の刊行した「説部
叢書」に対する関心が生まれて、実物を集める
ようになった。

もうひとつ。清末民初小説全般に関心をもつ
人だ。多数集めたなかに「説部叢書」が複数あ
り、文章を書くまでになった。

上記ふたつの人々は、実際に「説部叢書」本
を集めるだけでした。

清末民初翻訳研究のなかで「説部叢書」に触
れざるをえなくなる研究者にとっては、災難か
もしれない。言及する必要があるにもかかわらず、
実物が手元にない。無視するしか方法がない
のが悲しい。当時はあれほど大量に供給され
たにもかかわらず、入手するのがむづかしい。
奇妙なことだと思われるだろう。だが、それが
事実だ。

郭延礼『中国近代翻訳文学概論』(1998)*1を
書評したことがある*2。郭延礼は、該書におい
て商務印書館の「説部叢書」について説明して
いない。私は、不満をのべた。書名に『近代翻
訳文学』をうたいながら、それはないだろう、
という気持ちだった。今でもそう思う。理解度
第1層に属する。

中国での研究

あらためて振り返ってみる。

謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」(1980)*³は、商務印書館に勤務していた人の回想記だ。

『小説月報』に掲載した翻訳小説を単行本にして「説部叢書」に収録した。第3集を出す。日本小説の翻訳は欧米の小説よりも評判は低く、また「説部叢書」は欧米名家の作品を売り物にしていたから、それへの収録を中止した、などなど。

「第3集を出す」というが、実際は第4集がでている。日本小説があたかも収録されていないかのように書く。そうではない。日本小説は、最初から収録している。事実ではないことを記述している。そう書かざるをえなかった、事情があったのであろう。

つまり、謝菊曾は解説して事実誤認と誤解を含めてそれくらいのもの。「説部叢書」について詳しいことは書いていない。内輪話程度の紹介があるだけだといっていい。「説部叢書」成立の経過など、その説明は大ざっぱすぎる。あまり関心がなかったようだ。少しの知識をもった一般人とかかわらない。理解度第1層である。商務印書館関係者にしてそれくらいのもの。先行きが案じられる。

基礎資料として重要な目録が刊行されている。

上海図書館編『中国近代現代叢書目録』(1980)*⁴である。

1902-49年に出版された叢書の目録だ。商務印書館「説部叢書」「林訳小説叢書」などを収録する。なによりも信頼度を高めているのは、実物にもとづいて記述しているからだ。目録を手にした人は、すぐに理解するだろう。

「説部叢書」は有名だ。しかし、現在すでに実物入手することが困難な状況におちいつている。するとこの叢書目録が、研究者たちの大いに利用する第2次資料となる。書いてあるそのままを信じる人が出てくるのだ。人によって

は、この叢書目録を利用するだけで論文を書くことができると思えるらしい。

叢書目録の冒頭に次のような記述がある。

「1903年4月 - 1924年11月 中国商務印書館」
「1903年」は新暦で「4月」は旧暦を示す。今につづく新暦旧暦混用だ。ところが、掲載された作品に該当するものがない。最終作品の第4集第22編『情天補恨録』の刊行は1924年5月初版になっている。11月はどこにあるのか不明だ。

この叢書目録をよく見れば、2系列に分かれていることが理解できる。

第一集から第十集までの1系列(本稿では元版と称する)と初集以降(同じく初集本)の1系列だ。両者には、収録作品に少し違いがある。目録だけを見れば、それ以外は、両者ともに基本的に同じだ。集編の数字が変更になっただけ。実物を手にしなければ、表紙意匠の違いは理解できないだろう。

該目録には、大きな欠点がひとつある。

第一集に日本原作の「佳人奇遇」と「経国美談」の2編しか収録していないことだ。事實は第一集も全十編が刊行された。一集が全十編だから全十集で全体は100編だ。だが、なぜか叢書目録には2編しか掲げない。これを見た何人かの研究者は、第一集は2編のみの収録で、全92編(種でも同じ)であると短絡する。明らかに誤りである。

鄒振環「商務印書館版“林訳小説”的魅力」(2000)*⁵において「説部叢書」に言及している。

鄒振環は、私の見るところ、基本的には書物の実物を手にして論述する。私が彼の論文を信頼する理由だ。ところが、どうしたことかこの「説部叢書」に関する部分だけが違う。上の叢書目録をそのまま信じ込んでいる。

大型叢書で「1903年4月」に出版を開始した、と書く。第一集には「佳人奇遇」「経国美談」の2種を収録する。彼は、叢書目録を写しただけ。結局は、「合計92種」と誤る(128頁)。正



『蔵書家』第3輯

直なところ、やや意外な気がしなくもない。

もうひとつ、鄒振環『20世紀上海翻譯出版与文化變遷』(2000)*6がある。商務印書館の「説部叢書」部分は、『訳林旧踪』と同文だ。商務班「説部叢書」に欠陥のある叢書目録に基づいている。しかたなしに理解度第3層に置く。

原則をくりかえせば、実物を見ることから研究がはじまる。ただし、「説部叢書」の実物を所蔵するといっても知識があるとは限らない。

まわりを見回して先行文献が見つからない(と思ったらしい)。事實は、中国に手がかりはあった。既述の叢書目録は重要基礎資料だ。しかも、日本にはすでに詳細な論文が発表されていた(後述)。それらの存在を知らない中国人研究者は、独自に模索するしかない。むだな精力を使っている。

陸昕「説《説部叢書》」(2001)*7のことであ

る。

陸昕論文の公表は、中国では早いほうだろう。中国においてそれ以前に「説部叢書」をまとめて論じた文章があるとは、寡聞にして知らない。陸昕論文が出たのは2001年だ。あとで触れる中村忠行の1981年から数えて20年も遅れる。しかも、中村の水準には遠く及ばない。日本における「説部叢書」研究は、中国では誰も知らない。(ここでお断わりを。論述の都合で、先に中国における研究を説明する。日本での研究は、そのあとにまとめる)日本にある先行文献を承知せず、叢書目録という羅針盤も持たない。実物だけを手元におき、蔵書家陸昕はひとりできまよい遭難する。

文章の概要を紹介しながら説明する。

1 「説部叢書」は4集にわかれ、前の3集はそれぞれ100種、第4集は40種だ(106頁)。



元版表紙(タンポポ文様)



初集本表紙(リボン文様)

筆者注：陸昕が「説部叢書」の表紙を掲げながら説明しているのは、のちの初集本（2集、第3集、第4集を含む）である。しかも、第4集は22種だが、40種と誤る。どの目録にも第40編など記載されていない。樽本編『新編増補清末民初小説目録』（済南・齊魯書社2002。以下樽目録第3版と称する）に「説部叢書」の全部を収録している。だが、刊行された時間からみて陸昕が参照するのは（その気があったとしてだが）不可能だった。それならば、樽目録初版1988、第2版1997は、と要求するほうが無理なはなしだろう。

私が問題だと思うのは、陸昕が説明しているのは初集本のみであることだ。それ以前に元版が刊行されていることをご存じない。さらに先立つ先元版もある。陸昕は、まったく説明しない。説明がないということは、「説部叢書」成立経過についての知識がない、という意味だ。

2 初集100種は、光緒末年に完成したとの

べる（107頁）。

筆者注：末年だから光緒三十四年だ。すると、1908-09年になる。それは正しいのか。

3 表紙が変化していることを説明する。

筆者注：よく気がついた。さすがに実物を245種（初集91種、2集87種、3集63種、4集4種）を所有していると自慢するだけのことはある（108頁）。

4 初集の表紙は、柳と桃の花を下地にし、柳は緑、桃花は濃くてあでやか、中央に黒色で縦に書名、という。

筆者注：これが不可解だ。別に「説部叢書」元版（タンポポ文様）と初集本（リボン文様）の表紙を掲げておく。

その両者を見てほしい。陸昕が説明するような、柳と桃花、中央に黒色縦書き書名という意匠は、どちらにも該当しない。陸昕がなにについて書いているのか、この説明では不明だ（後述）。

「説部叢書」の成立過程を大きく示せば、先元版 元版1型2型 初集本へと変化する。最初から初集本であったわけではない。また、陸昕のいうような表紙をもつ「説部叢書」は存在しない。実物を所蔵しているはずなのに、説明が食い違っているのはどういうことだろう。

見てほしい。元版はタンポポ文様に、書名は横書きが特徴である。話の順序からいえば、陸昕は元版を説明しているように見える。だが、表紙の説明が異なるので疑問が生じる。

だいいち陸昕が掲げている表紙写真の1葉は、元版ではなくて次に説明する初集本なのだ(前出写真『蔵書家』第3輯参照)。

5 民国二、三年に重印(再版)した、と陸昕は書く。

筆者注:西暦でいえば、1913、1914年だが、ここもあやふやだ。どちらなのか。私が見るところ、全部を再版したのは1914年であって1913年ではない。陸昕の説明は、厳密さに欠ける。

6 その表紙だ。新しくなって、青色の花模様で赤色縦組みの書名だ、という。

筆者注:こちらは、実物と一致している。

7 再版初集本の表紙について、陸昕が目にしたのは、赤色縦組み書名とそれを取り囲む青色花模様だ。

筆者注:私の受け取り方はすこし違う。全体を枠取りする赤色リボン文様のほうが印象強い。だから、リボン文様と称している。

この初集が広く読者のもとに出回った。「説部叢書」といえば、リボン文様の表紙を提示するのが普通だ。

版元の商務印書館からして、自社刊行物の歴史資料として掲げてこのリボン文様の初集を示す。それ以前にタンポポ文様の元版があることをまるで知らないかのような態度をとる。おまけに、「説部叢書」刊行の詳細を説明したこともない。ならば、出版目録に元版を収録しているかといえば、それも無い。『商務印書館図書目録(1897-1949)』(北京・商務印書館1981)が

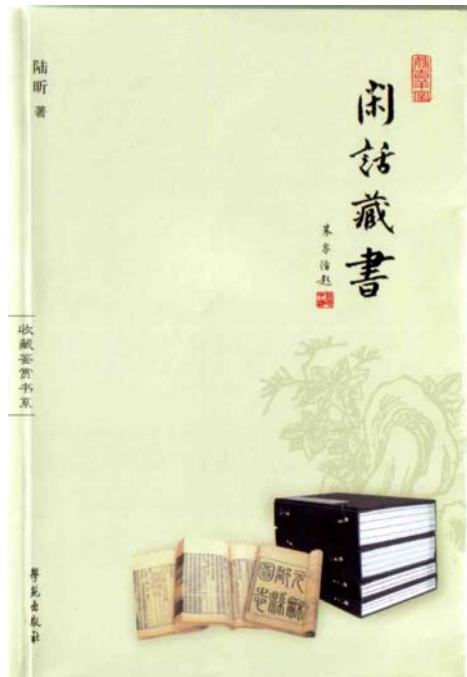
それだ(理解度第2層に分類する)。だいいちその目録には、基本事項である刊年を明記しない。これでは、資料として使用することができないのは常識だ。杜撰な編集物だといわなければならないのは、商務印書館編集部にとっては恥ずかしいことだろう。一般の研究者が元版を知らない原因にもなっている。すると、日本の中村忠行は例外だった。

今、2集、第3集、第4集については、触れない。問題が集中しているのは、元版と初集なのだ。2集以降では難しい問題は存在していない。本稿で注目するのは、元版から初集への転換問題である。

以上をまとめる。

陸昕2001は、初集本(これには2集、第3集、第4集を含む)については、説明している。表紙が異なることに言及しながら、それを初集内のことだと理解しているらしい。しかも、「説部叢書」ではない表紙を提示する。ここには勘違いがある。理解度第2層に所属する。

では、樽目録第3版が利用できるようになったから、記述は変わったか。



陸昕『閑話蔵書』

陸昕「従《説部叢書》談搜書所見」(2005)*⁸である。時間的に見て、樽目錄第3版を参照することはできたはずだ。

該書の新しい趣向として、丁東との対談形式で語られる。

同じ説明ではじまる。「説部叢書」は全文で4集に分かれる、などなど。ここでも第4集は40種(203、204頁)と誤ったままだ。

「初集」の表紙を説明して、以前の語句を書きあらためている。すなわち、一律に、藤、緑の柳、青草、および風に舞う垂れ下がった桃色の花などが下地になっている。中央に黒色縦組みの書名だ、という(203-204頁)。

以前は、「柳と桃の花を下地にし」と書いていた。書名を明らかにしていないから、なんのことかわからなかった。陸昕の該書に色彩写真1葉でそれらしい単行本の表紙が掲げられている。そればかりか、毎ページ小口に同じものの縮小白黒写真を配している。それくらいお気に入りの珍品らしい。『匈奴奇士録』である(参照：樽本「周作人訳ヨーカイ・モール『匈奴奇士録』の英訳底本について」)。説明して光緒三十四年九月初版、別に白黒写真を135頁に収録して念がいつている。また、「説部叢書」2集第51編民国四年十月再版本の表紙写真を136頁に掲げる。本稿では、より鮮やかな色彩表紙を孔夫子旧書網から引用しておく。

表紙には「欧美名家小説」とある。絵図に描かれるのは柳ではない。藤棚にからみつく藤花だ。中央に黒色縦組みで書名が見える。これは、「説部叢書」ではない。元版でもないし初集本でもない。表紙に明記してある「欧美名家小説」シリーズの1冊にすぎない。なぜこれを陸昕は「説部叢書」だと思ったのか。どうやら、彼は以前から勘違いを続けていたようだ。

周作人訳『匈奴奇士録』が「説部叢書」2集第51編に収録されるのは、1915年10月16日再版時である。2集の表紙意匠はリボン文様だ。

上記のように刊年を書いてきて、陸昕の誤解



周作人訳『匈奴奇士録』「欧美名家小説」シリーズ

にいたる筋道が見えてきた。陸昕は、なぜ「欧美名家小説」の1種を「説部叢書」初集本だと誤認したか。

出発点は、奥付の「光緒三十四年九月初版」だ。これは間違いのない。ただし、なんども書いている「欧美名家小説」の1種であることをご確認いただきたい。

次は、「説部叢書」2集第51編の刊年だ。陸昕は「民国四年十月再版」としか記述していない。だが、実際は「戊申九月八日初版/民国四年十月十六日再版」なのだ。戊申は光緒三十四年のこと。

戊申(光緒三十四年)に「欧美名家小説」の1種として刊行された『匈奴奇士録』は、1915年に「説部叢書」2集第51編に編入されたことを意味している。

それだけの経過であるにすぎない。

不思議なのは、陸昕の考え方だ。彼は、『匈奴奇士録』初版を「説部叢書」初集だと勘違い

した。表紙に「欧米名家小説」と明記されているにもかかわらず、それを無視したらしい。

陸昕が迷走することになった経緯は、私が考えるにたぶん次のようだ。

彼が誤解しているのは、『匈奴奇士録』の「説部叢書」2集本と周作人+魯迅『紅星佚史』の「説部叢書」初集本をならべたところに見られる(136、137頁)。

初集本と2集本の表紙は同じりボン文様だ。『紅星佚史』は、最初から「説部叢書」に収録されている。そこから『匈奴奇士録』も同様に「説部叢書」に収録された、と陸昕は考えたのではないか。「戊申九月八日初版/民国四年十月十六日再版」という奥付表示を見てほしい。初版は「説部叢書」初集であり、再版は同2集だという理解のしかただ。

その証拠に、次のように説明する。

「前に新文学を説明した時に触れた周作人の変名である周遼訳述の2種類の著作(注:『匈奴奇士録』と『紅星佚史』)は、「説部叢書」に収録された」(204頁)

もともとおかしいだろう。初集100編のつぎに2集100編が編集刊行されている。初集に収録されて、それが再度2集にあるとすれば、同一系列内で重複するではないか。ありえない。だが、一度思いこめば、その誤りから抜け出すことはむづかしい。

陸昕がそれ以外に述べる内容も、本稿に關係する部分は以前のものと対照して変更はない。

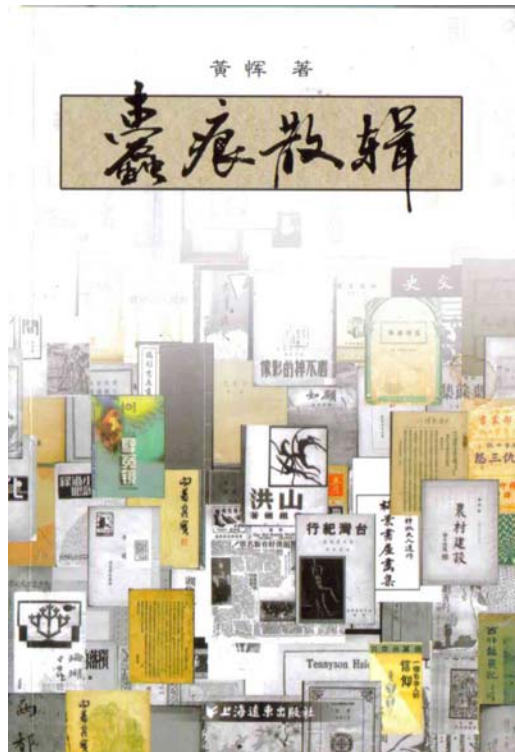
結局のところ、陸昕は、初集本の前に元版が刊行されていたことを知らないのだ。元版タンポポ文様の表紙については、なにもいわないことからわかる。

陸昕は樽目録第3版を見ていない。誤りをくり返している。これでは、理解度第2層にとどまる。

陸昕論文に触発されたのが、次の黄暉である。

黄暉「也説《説部叢書》」(2008)*⁹がある。

先に陸昕が「説部叢書」は第4集まで刊行さ



黄暉『蠹痕散輯』

れた、と書いた。それを読んだ黄暉が、自分は「第六集第一編、第九集第十編」を所有するという。だから陸昕の「第四集四十種」説は動揺するそうだ。私は自分の眼を一瞬疑う。なにをいっているのか。

第九集第十編の表紙写真が掲載されている(60頁)。見れば、元版である。陸昕が説明しているのは、初集本だ。先行する元版と、後から出てくる初集本の集編番号が違うのは当然すぎてはなしにならない。元版の「第六集第一編、第九集第十編」は、のちの初集に統合される。それぞれ自動的に初集第51編、第90編と番号が振り替えられた。問題はなにもない。

黄暉は、「説部叢書」が成立していく過程を知らないことを自ら暴露した。だが、カンは鋭い。中国においては、と注がつくのは残念なことだが、2系列の「説部叢書」があると推測する。作品『簾外人』は、甲「説部叢書」初集第四十七編で、乙「説部叢書」ではそれが第五集

第七編にあたる。ふたつとも光緒末年に出版されているが、なぜそのような、あってはならない「重複事件(双包案)」が出現するのか(61頁)。黄暉は、そのような疑問を提出するだけである。これを見ても、彼は混乱していると私は思う。「双包案」に注目のこと。5年後の2013年に別論文の中に再度出現するから。

「説部叢書」を甲乙の2系列にわけたのは正解に近づいている。

黄暉がいう乙は元版であり、甲は初集本なのである。1981年という昔に、中村忠行がすでにそう指摘している。「重複事件」でもなんでもなし。元版十集(各集十編。漢数字を使う)合計100編が、初集と改称され全100編になっただけ。元版第五集第七編は、先ほどのとおり初集第47編に読み替えられた。矛盾するところは、ない。もとから重複するようになっている。

黄暉は、陸昕論文を読んだ。初集についての知識はある。また、所蔵する元版を掲げ、甲乙2系列という見方を示した。しかし、疑問を書きつけただけ。思考を一步深めることができなかった。陸昕と同様の理解度第2層どまりである。

劉徳隆の論文を見つけたのはまったくの偶然からだ。「商務印書館と小説」である。2008年に中国で開催された張元濟研討会で発表したという。本人に確認した。研討会で発表したきり、どこの雑誌にも投稿しなかった。なぜ、ウェブ上にあるのか不明だ、と*10。「説部叢書」に関する発言を読むことができる。ここに取り上げる理由である。

劉徳隆は、商務印書館が刊行した「説部叢書」を簡単に紹介している。注目すべきは、「十集本」「四集本」と名称を使用して2種にわかれていることだ。中国人研究者としては、劉徳隆は早くから区別している。微妙なところだが、次に紹介する付建舟と前後する。理解度第3層に属する。

ただし、第一集を2種とし、合計92種に誤る。

その原因は、『中国近代現代叢書目録』がそう表示しているからだろう。

中国で本格的な論文が発表されたのは、2009年だ。

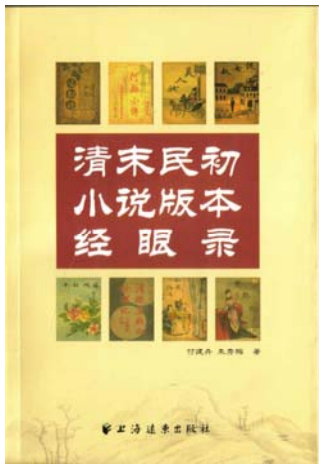
付建舟「談談《説部叢書》」(2009)*11である。

付建舟は、最初に黄暉の甲乙2系列をつかまえる。2系列に分けるのは、近代小説研究者にしてみれば、「常識」だそう(306頁)。その証拠は、樽本『新編[増補]清末民初小説目録』(2002)が明確に区別しているところにある。ただし、解釈と説明はしていない、と付建舟はいう(同上頁)。どこかおかしい。

私は、中村忠行論文1981を読んでいる。中村のいう元版と初集本を区別して『清末民初小説目録』[初版](1988)に記入した。私にとっては「常識」だ。だから、記述に工夫をした。区別したことがわかるように元版には漢数字を、初集本にはアラビア数字に使い分けた理由である。だがその後、中国人研究者が叢書2系列を区別したであろうか。上にあげた、陸昕2001、陸昕2005を見ればよい。いずれも元版の存在を知らない。黄暉2008は推測して甲乙2系列だが、前後が逆である。明確に認識しているとはいいがたい。つまり、2系列の存在は、中国人研究者の認知外にある(劉徳隆は除いてもよい)。中国学界においてほとんど誰も知らない「常識」は、それゆえ「常識」ではありえない。

付建舟の文章からは、目録について中国人研究者がもつ一般的な認識の存在を私は感じる。中国では、目録とは先行目録を複写して編集するものだと考えているらしい。そこにあるものを左から右に写すだけ。だから、目録に記述されたことは、誰でもが知っている「常識」にすぎない(はずだ)。そういう考え方である。付建舟は、樽目録第3版に独自の工夫がなされているとは思ってもいいとわかる。

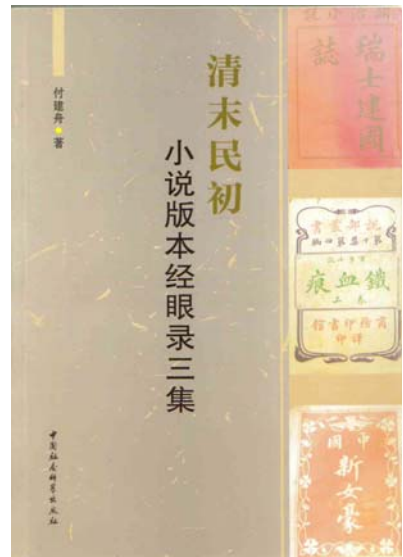
付建舟は、中村1981、神田2002が書かれていることを夢にも思わない。ゆえに、広告にもとづいて「説部叢書」の2系列を追跡し説明しは



『清末民初小説版本経眼録』



『清末民初小説版本経眼録二集』



『清末民初小説版本経眼録三集』

じめる。彼にとっては、そうすることが必要だった。既知の事柄を、それとは知らずに最初からやり直す。二度手間だ。研究者としては恥ずかしいだろう。知っている私はそう思う。

付建舟の見解を以下にまとめる。

1 商務印書館「説部叢書」は、2系列「十集系列」「四集系列」にわかれる。

2 「十集系列」は十集、各集10種、合計100種。「四集系列」は、前の三集は每集100種、第四集は22種、合計322種。

3 「十集系列」100種は、「四集系列」の^{ママ}初編だ。

4 1903年から始まり1924年で終了する。以上ようになる。

3に見える「初編」(309頁)は、「初集」(307頁)と書くほうが適切だ。

第四集が22種というのは、樽目録第3版に根拠を求めている。叢書目録は見なかったのか。

読者のご賢察とおり、付建舟のいう「十集系列」は私のいう元版だし、「四集系列」は初集本にほかならない。ならば、付建舟の到達水準は、理解度第3層でしかない。

ようやくここまで来たか、あと一步だった。これが私の感想だ。中村忠行1981から付建舟

2009まで、28年間もの時間が経過している。しかも、最初の中村が到達している第4層にも届かない。ほとんど1世代を経過しながらその結果だ。その差を見れば、ため息が出てきそうになる。

付建舟「清末民初新小説広告的文学史意義」(2012)*¹²がある。「説部叢書」については簡単に説明するだけ。刊行は1903年から始まったと書きながら、元版については言及しない。また、出版は1922年まで^{ママ}継続されたと誤記する(72頁)。彼のいう「四集系列」だけを掲げる。理解度第2層に後退した。

いわずにしなければならないのは、付建舟は、資料の発掘を着実にこなしていることだ。これは注目にあたいする。

以下の3著を公開している。

付建舟、朱秀梅『清末民初小説版本経眼録』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2010.6

付建舟『清末民初小説版本経眼録二集』杭州・浙江工商大学出版社2013.1

付建舟『清末民初小説版本経眼録三集』北京・中国社会科学出版社2013.8

多くの版本についてその表紙、奥付写真を掲載する。そのぶん資料的価値が高い。ほかの書目を引用した説明を読まされるより、実物の写真を掲げてもらった方がどれだけ有用かわからない。

参考までに触れておく。上記経眼録2種に掲載されている商務版「説部叢書」の表紙写真を数えた。元版と初集本(2集、第3、4集を含む)に分ける。上中下巻のばあいは、3葉とする。「林訳小説叢書」は数えない。

経眼録 元版3葉(1型1葉、2型2葉) 初集本57葉
 経眼録二集 元版2型のみ21葉 初集本68葉
 経眼録三集 元版2型のみ6葉 初集本58葉

付建舟の説明は、基本的に十集系列(元版1型2型)と四集系列(初集本)の2種についてだ。理解度第3層である。

努力の着実な積み重ねの上に、研究が結実する可能性が生まれる。ことに付建舟の経眼録二集には、重要版本が掲載されていることを私は理解した。この版本が出現したことにより、ある疑問を解決することができる。「説部叢書」の改組時期についての問題だ。資料を提出した付建舟本人は、そのことに気づいてはいない。興味の持ち方が私とは異なっているからだろう。

罫

【注】

- 1) 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』漢口・湖北教育出版社1998.3 / 修訂本 武漢・湖北教育出版社2005.7第2版第3次印刷)
- 2) 沢本香子名で発表。「本格的翻譯文学研究の出現 郭延礼『中国近代翻譯文学概論』について」『清末小説』第21号1998.12.1、1-15頁。のち樽本『清末小説研究論』2005所収。要約：郭延礼の翻譯文学研究が、参考文献を海外に求めており研究の成果が深く広いことを評価する。内容から分類して分野別に記述する第1部と翻訳者個人が

らその翻譯業績を総括する第2部によって構成されている。翻譯文学全体の流れを概説しながら個別の翻譯に言及しており立体的な記述が理解を助ける。さらに、翻譯原本、その作者についても判明している限りは原文でも表示しているのが役立つ。それができたのも日本、香港など外国の研究の成果を取り入れたからだ。

- 3) 謝菊曾「《説部叢書》和《林訳小説》」「涵芬楼往事」『随筆』第6集1980.2
- 4) 上海図書館編『中国近代現代叢書目録』香港・商務印書館分館1980.2
- 5) 鄒振環「商務印書館版“林訳小説”的魅力」『訳林旧踪』南昌・江西教育出版社2000.9
- 6) 鄒振環『20世紀上海翻譯出版与文化變遷』南寧・広西教育出版社2000.12
- 7) 陸昕「説《説部叢書》」『蔵書家』第3輯2001.6
- 8) 陸昕「從《説部叢書》談搜書所見」『閑話蔵書』北京・学苑出版社2005.8北京第3次印刷 所蔵鑑賞書系
- 9) 黃惲「也説《説部叢書》」『蠹痕散輯』上海世紀出版股份有限公司遠東出版社2008.2
- 10) 張人鳳氏のご教示に感謝します。劉德隆「商務印書館と小説」は以下の書籍に収録されていたので購入した。張元濟研究会、張元濟図書館編『張元濟研究論文集』北京・中国文史出版社2009.8 紀念張元濟先生誕辰140周年暨第三屆學術思想研討會論文集
- 11) 付建舟「談談《説部叢書》」『明清小説研究』2009年第3期(總第93期)2009発行月日不記
- 12) 付建舟「清末民初新小説廣告的文学史意義」『文学評論』2012年第6期 2012.11.15

清末小説から

黎子鵬編注 『晚清基督教叙事文学選粹』台湾・橄欖出版有限公司2012.1

楊麗華 『林紘翻譯研究 基於費爾克拉夫話語分析框架的視覺』湖南師範大學2012.5 博士論文

張麗萍 『報刊与文化身份 1898-1918中国婦女報刊研究』北京・中国書籍出版社2012.9

張偉、嚴潔瓊執筆 『張園 清末民初上海的社会沙龍(史料)』上海・同濟大學出版社2013.8

李生濱 『晚清思想文化与魯迅 兼論其小説雜家的文化個性』北京・中国社会科学出版社2013.10 寧夏大學優秀學術著作叢書

李永東 『租界文化語境下的中国近現代文學』北京・人民出版社2013.10

何光水 『儒家文化与晚清新小説的興起 以梁啓超小説功用觀為中心考察』武漢・湖北人民出版社2013.12

吳沢泉 『中国近代小説觀念研究』北京・中国社会科学出版社2014.5 中青文庫

徐從輝編 『周作人研究資料』上下卷 天津人民出版社2014.1 中国現代作家研究資料叢書

趙娟 『中国近現代教育小説研究』保定・河北大學出版社2014.1

陳大康 『中国近代小説編年史』全6冊 北京・人民文學出版社2014.1

張治 『異域与新學 晚清海外旅行写作研究』北京大學出版社2014.1

徐兆璋著 蘇醒整理 『徐兆璋雜著七種』南京・鳳凰出版傳媒股份有限公司、鳳凰出版社2014.3 中国近現代稀見史料叢刊 第1輯

潘建国 新旧說部兩搜尋 徐兆璋之小説活動及其相關著述(代前言) 同上

樂偉平 『小説林社研究』上下 台灣・花木蘭文化出版社2014.3 古典文獻研究輯刊 18編第18、19冊

王勇 『《東方雜誌》与現代中国文學』北京・中国社会科学出版社2014.4 “學術新視野”叢書

習斌 我的晚清『現形記』小説收藏『藏書家』18輯 2014.3

嚴基珠 近代初期 ROBINSON CRUSOE の翻譯について 崔南善の訳を中心に『学芸の還流 東-西をめぐる翻譯・映像・思想』專修

大學出版局2014.3.28 專修大學社會科學研究所 社會科學研究叢書16

三枝壽勝 『十五少年』は東アジアでどのように翻譯されたのか JULES VERNE; DEUX ANS DE VACANCES から『冒險小説 十五小豪傑』に至るまで 同上

加部勇一郎 縛りたい男 清末の『鏡花縁』続書二種を読む『野草』第94号 2014.8.1

藤井得弘 文明の名のもとに 清末探偵小説「羅師福」と可視化の技術 同上

萩野脩二 野心的な資料集(内田慶市編著『漢訳イソップ集』)『東方』402号 2014.8.5

『明清小説研究』2014年第1期(總第111期)
2014発行月日不記

論《孽海花》中的上海-北京都市書写及其文化意蘊
.....梅新林、紀蘭香
黃世仲的報業活動与小説創作之關係探析紀德君
職業化初身份轉換的困惑与先声之舉 萌芽時期的
報人小説家研究程麗紅、申暢
試論近代西方傳教士創作的中文新小説袁進

『明清小説研究』2014年第2期(總第112期)
2014発行月日不記

蘇州小説 晚清小説研究の另一箇入口張袁月
晚清海歸小説作家的写作与交遊黃曼
故事的再生産及其与媒体的關係 從《淞隱漫録・
紀日本女子阿伝事》說起辺茜
“陳森”、“陳森書”之辨 《中国小説史略》積
疑一則李永泉

『翻譯史研究』2013
上海・復旦大學出版有限公司2013.12

挿圖翻譯和基督教的本色化 晚清漢訳《天路歷程》の挿圖研究
.....姚達兌
遊走於國族叙事和小叙事之間:清末民初的夏洛蒂・
科黛(Charlotte Corday)形象研究.....唐欣玉
重構“小説場域”的性別秩序 以清末民初西方
“女小説家”的伝記紹介為中心馬勤勤